
死霊狩り

阿万之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死霊狩り

【Nコード】

N8767X

【作者名】

阿万之

【あらすじ】

暗闇が至るところに潜んでいるにせよ、高宮家の三人の兄弟は互いに助け合って生きていた……。これは、そんな兄弟たちの青春や、家族との交流を描くお話。ちょいホラーで、恋愛要素ありの学園モノ。

登場人物紹介

雨宮憂黎 主人公の高校二年生。鬱になりやすい。死霊になりかけた

雨宮透 主人公の兄で同じ高校に通う三年生。明るく面倒見が
いい

雨宮光 主人公の兄で雨宮家の長男。不良。透と学年は同じだが留年している

雨宮憂一 主人公の父親

雨宮聡美 主人公の母親

赤根薫 主人公に想いを寄せる主人公のクラスメイト。クラスでも美人と評判

戸辺凌 主人公のクラスメイト

加藤稔 主人公のクラスメイトで死霊狩りを学年の仲間を揃え
て行う

市瀬楓 死霊狩り仲間の一人。気弱な外見

安達未来 主人公のクラスメイトで主人公に想いを寄せる。熱
狂的な死霊狩り好き

片桐岬 未来の友人。残忍な死霊狩りをする一部では有名

中村美音 透と同じ学年で透の元交際相手

水嶋直弥 主人公の中学時代のクラスメート。主人公を憎んでいる。バイクグループに加入している

一章 狩りのとき 一話（前書き）

よろしく

一章 狩りのとき 一話

高宮家には三人の兄弟がいる。どれもいつてしまえば美男子の部類ではあるが、その中でも特に高宮憂黎ゆうりは女性に好かれる美しい顔立ちをしていた。が、は女子に人気はあったとはいえ、決して爽やかとはいえないその性格で疎まれることも多かった。そんな彼は高校二年生で、同じ高校の一学年上高宮透とあという憂黎とはまた違ったタイプの美男子かつ爽やかな性格の兄がいた。この兄弟にはさらに上に兄が一人いる。別の高校に通っていて、高校三年生だが留年しており、十九歳の長男、高宮 光ひかるがいる。光は最近再び増え始めた暴走するバイクグループに加入しており、その中ではそこそこの地位にいるらしい。

彼ら三人は仲が悪くはない。根暗で自分の殻に籠りがちの三男憂黎。明るく爽やかで長男よりもっさりしていて頼もしい次男透。馬鹿で自己中心的で自由奔放の長男光。ばらばらの性格の三人だが、彼らは揃えばそれなりに会話もするし、三人一緒に外食して兄弟愛を深めあったりもする。

暗闇が至る所に潜んでいるにせよ、彼らはそれなりに人生を楽しんでいた。しかし憂黎だけは、この世界を憎んでいた。

一章 二話（前書き）

ズンズンっていいですね

一章 二話

その日は家族でキャンプをする日だった。高校二年生の憂黎は今と変わらず、どこかネガティブな思いを抱えて生きてきた。彼の心に渦巻く闇は、徐々に膨れ上がっていった。キャンプなんかどうでもいいという気持ちがあった。もう高校生なのだ。家族でキャンプなんて行きたくない。憂黎は外出が嫌いだった。

だが兄の透は実に楽しそうに目的地に着くのを心待ちにしている。透がいくと行ったから着いてきたのだ。透がいなければこんなところにはこない。

長男の光は車内にはいない。彼は一人バイクで現地向かった。光は不良らしく派手な容貌だが、兄弟の中で浮いているということもない。優等生でもある透も髪は明るい茶色だ。顔が爽やかでハンサムな透は何をしても印象は悪くない。憂黎も髪は地毛だがうつすらと茶色がかっていて、肌は透き通るような白さだった。三人の見た目はどこか派手に映る。

彼らの両親の、父親を雨宮憂一と言う。憂黎の憂は彼の名前から取った。背筋のがっしりした男で、ハリウッドのアクション俳優に陶酔し、日タトレーニングを欠かさない。性格は穏やかでユーモアのセンスがあり、映画に出てくるアットホームな雰囲気父親を目指している。年は四十五。仕事はそこそこ大きな商社に勤めている。やり手で性格もよく面倒見があるので部下から親しまれているが、最近自分よりもできる後輩に少し悩まされている。憂一は仕事と家族どちらも愛し、その二つの為だけに生きている。

「パソコン持ってきたんだっけ？」助手席に座る憂一の妻、聡美が夫に尋ねた。

「うん。一応仕事もしないと」

「ま、いいけど。カメラは持ってきたの？」

憂一は苦い顔をした。「なんてこった……用意はしてたのに」

「ほら」 聡美は鞆からカメラを取り出して夫に見せた。「こうな
ると思つて」

「さすがだなあ」

「うっかり屋さん。うっかり屋さんは死霊にだって簡単に捕まっちゃうんだから」

「さすがに、そんなへまはしないよ」

「でも最近被害多いらしいわよ。あちこちで死者がでてる。仲間入りなんて御免よ」

「連中の仲間？ 冗談じゃない。あいつらは残飯にでも群がってればいいんだ……しかし被害がこれ以上広がるようなら、大掃除が必要かもな」

「俺はやるよ」 威勢よく透が発言する。「募るならやる」

「ボランティアはいいことだよ」

返事は曖昧にごまかされた。

キャンプ場所に着いたのは昼を少し過ぎたくらいだった。一泊するの다가持ってきた携帯型ゲーム機はバッテリーが持つだろうか。憂黎の心配するのはそこだった。

山は涼しく、木々は微風に揺られて葉を落としている。そろそろ秋色になろうとしていた。

「避暑地にはうってつけた」 透が言った。

「焼肉食べたらすぐに帰りたいな」

憂黎が本音をだすと透が小突いた。

「せっかくなんだから堪能しろよ。気持ちのいい場所だ」

「そうかな」 ただの山だ。鬱陶しい木々があり、家の近くでは見られない大きなアリがいるだけだ。

「そうだよ。光はどこにいるかな」 透は兄を名前で呼ぶ。しかし時と場合で兄や兄貴と呼んで使い分けている。

「光兄ならどうせ峠道にスピード出してスリップして谷底に落ちて死んで熊の餌だろ」

透はくすりと笑う。「いや、光は結構慎重なんだ。スピードは飛

ばすけど」

バイクのやかましい轟音が聞こえてきた。噂をすればなんとやらで光が到着した。

父親が兄弟を呼び付ける。

「先に荷物を運んじまうぞ」

「なかなか楽しい道だった」アロハシャツを着た光が風を切るような歩きでやってきた。サングラスが悪人的でよく似合っていた。

「光も荷物を運んでくれ。テントを張れたらすぐにバーベキューにしよう」

「肉が食いたくて仕方ねえ。おう、ちゃっちやと運んで飯にするぞ」
「光も手伝うんだよ」

透は光にテーブル台を渡した。

「しょうがねえな」光は重いそれをいやいや運ぶ。透は憂一と一緒にテントを運び、聡美は軽いものを。憂黎は肉の入ったクーラーボックスを選んで運んだ。

テントを張る場所を決めると再び車に戻り残った荷物を運ぶ。

高宮一家のキャンプの周囲には複数のキャンパーがそれぞれテントを張っていた。

「熊が現れてもうちのテントが襲撃される可能性は低いな」憂一が言った。

「そんなに怖いならライフル銃もってくればよかったじゃん」と透。
「何でも銃に頼るのはよくないぞ」

運に頼るよりはましだろ、と憂黎は思った。

早速炭に火をつける。火力はすぐに上がる。憂黎がゲームを開始してすぐ中断した。

肉はやはり旨かった。

「やっぱり外で食べる肉は最高だ！」憂一はビールと一緒に流し込むように肉を楽しんでいる。

光もビールを呑んでいた。彼はすでに憂一より酒に強い。

憂黎は肉を食べながらも陰鬱とした気分は隠せなかった。何故こ

んなところにいるんだろう。肉はうまいが、こんな山奥で、しかもビールのようなものを囲って寝なくてはならないとは。堪えられない。ポケットのゲームを取り出したかった。ゲームだけが彼の支えだった。

「肉だけじゃなく野菜も食べるよ。まだまだ沢山あるからな」透がたしなめた。

「憂黎は肉食だからな」憂一が笑う。「ビールはどうだ？」

「こら」妻が夫を止めた。

「まあ呑めよ」少し酔っている光が罐を開けた。

ビールなんて余裕だ。憂黎はビールを光から注いでもらい、飲みほす。

「いい飲みっぷりだな。透はどうする？」

「俺はいいよ」透は酒が嫌いだった。

ビールはいい刺激となり、憂黎は自身の憂鬱を一時的に忘れた。

「昼間っから酔っ払っちゃって」聡美は呆れ顔をする。

三十分足らずで肉は底をつき、バーベキューは終了した。憂黎は特にやることもないので携帯ゲームに没頭することにした。場所は変わってもゲームの面白さにたいした代わりはないようだ。すると透がきた。

「よう、ゲームなんてしないで湖でもいこうぜ」

「一人で行ってきなよ」冷たく一瞥してそっけなくそう返す。

「なんだよ。こんなとこまできてそれはないだろ」

「光兄は？」

「バイクでかつ飛ばしてくるって」

透の誘い方はいつも強引でしつこい。断り続けるのは相当の気力を要する。面倒だが兄の提案に乗るのも弟の役割の一つだ。憂黎は嘆息し、ゲームを止めた。

「湖は近いんだろ？」

「すぐそこだ。湖の近くにきて湖を見ないなんて馬鹿のすることだぜ」

「湖なんて見ても面白くない。喜んで見に行くほうが馬鹿だ」

透は弟の返しに何もいわず歩きだした。憂黎もついていく。獣道を歩き、木々を掻き分けるようにいくとすぐに小さな湖が見えてきた。湖は綺麗な楕円形で、水は澄んでいた。

「これ湖？ 池ってレベルじゃない」

「赤須湖っていうれっきとした湖だよ。ボートで泳ぐにはいい感じだな」

「兄貴と二人で？ やだね」

「どっちみちボート貸しもしてないみたいだ。だったら何をしようか」

「戻る」

「釣りだな。うん。それしかないよ」

「釣り道具なんてもってないだろ」

「だな。ならばらく眺めてるか」

「俺はいいよ。先戻るね」

透は返事をしなかった。なので憂黎はそのままテントまで戻った。

一章 三話

暗闇が急速に街を覆っていたにせよ、山々は比較的平和だった。騒ぎに発展したのは初めてというわけではないが、大騒ぎという意味では初めてかもしれない。一時的とはいえ。

無数の星の下で彼ら一家は安らいでいた。天井のない場所で星明かりに照らされ、宇宙の神秘に思いを寄せているのは憂一だった。こんなに神々しい世界が常にあるのだ。自分はとても幸福なのかもしれないと隣の椅子に座る妻の肩を抱く。

夜は明るかった。

憂黎も空を見ていた。彼の半ば空虚な胸はそれらにときめきもせず、早く帰りたいという思いだけがあった。

「で、飯は？」散々辺りを走ってきた光が言った。

「カップヌードルだ」憂一はにつこりと微笑んだ。

昼間の一時的な快活も失われた憂黎は再びどんよりとし、半ば自分の殻に籠った。なんで世界は、現実はどうもぱっとしなく、作業的な虚しさがあるばかりなのだろうと。こんな世界、滅んでしまえばいいのに。

そんな憂黎の憂鬱を知ってか知らずか、兄の透は見守るような、慈しむような視線を弟の横顔に向けていた。

光はカップヌードルを食べるとすぐに寝た。

「息子たちとキャンプなんてこれが最後かもな」就寝する前に憂一は隣で横になって読書をしている聡美に言った。

「どうかしら。意外といい子たちばかりだから。光も、不良だけどしっかり参加したし」

「うん。あいつは断るだろうと思った。家族、というよりあいつら兄弟の絆はなかなか強い」

「むしろ大人になったら今以上にこういう機会が増える気がする。そっという予感がするの」

「君と二人だけでも構わないけどな」憂一は聡美の胸に手を置いた。その手をつねられ、ひっこめる。

「心にもないことを」

「心外だな。まあ、彼らが今後どう成長するのか、実に楽しみだ。ヤクザにはならないで欲しいな」

しかし光は問題あるまいと憂一は思う。ああ見えて芯はしっかりしている。透は一番安定している。時々とても大人に感じる。憂黎は……一番心配だ。

朝方に透が起きると光が寝息をたてていた。時計を見る。六時を少し過ぎたところだ。あともう少し寝てもいいが、憂黎がいないのはどういうわけだろう。

小用だろうか。ここからトイレまで少し離れていた。とにかく彼は立ち上がり、テントを出た。少し離れたところにある親父たちのテントを除いてみようか。見たくもないものが視界に飛び込んでくるのはいやなのでそれは遠慮しておいた。まあ、こんなところでそれはないだろうが。

憂黎はどこへいったのだろう。透は湖のほうへ向かった。獣道を進み湖が見えたが辺りに人の気配はない。戻る。後は適当に歩いてみる。川のせせらぎの音が聞こえてくる。清流の中に浮く岩場に憂黎が座っていた。

「何してんだ？」

憂黎が振り向く。その顔はこの川のように澄んで見えた。

「魚を見てるんだ」

「魚がいるのか？」透は憂黎の隣にある岩場に飛び立った。川の中を覗く。憂黎のいうように、透き通った流れに優雅に泳ぐ魚が数匹見えた。

「湖見るよりこっちのほうが楽しいね」

「そうかもな。でも随分早起だったじゃないか」

「なんとなく」

透は複雑だがどこか安心したような笑みを浮かべる。

「眠くないか」

「車で寝るよ」

川魚はゆらゆらと水の中を泳ぐ。憂黎はどこかうらやましいような顔で魚たちを見つめていた。

八時に食事を取る。飯盒など本格的ではないレトカレーを食べる。あとはインスタントのコンソメスープ。

「どうだ、こんなのだって大自然の中では格別だろう？」憂一は上手そうにカレーを食している。

「どうかな」透が曖昧に返す。透としてはもう少し趣向を凝らして見たかったが、それは次の機会にしておこう。また家族といくか、友人たちといくことになるのかはわからない。飯盒を炊いたりするのはとても楽しいものに違いない。

透が次のキャンプを夢想しているとき、憂黎は再び暗い気分に浸っていた。

一章 四話

下山。まだ昼前だったが、聡美が色々やることもあると言いつ張り、早い帰宅となった。久しぶりの家族でのバーベキューは終わった。

透は相変わらず憂鬱な顔を浮かべている弟を見た。色々憂慮すべきことはあったが、あえてそれは無視した。気になるが、楽しいキヤンプの帰りじゃないか。

お、と運転している父親が声を上げて車を止めた。眠りについていた妻が目を開ける。

「あら」

憂黎は、一家はふらふらと虚ろな様子で道路の真ん中を歩く男を見た。男は紺の背広姿で、身なりはそれなりに整っている。新調したばかりといったスーツだが、それを着た者は浮浪者のように汚らしかった。その目は虚ろで焦点があっておらず、口は開き、そして皮膚は紫だった。

「Bタイプとは珍しい。犠牲になったのは哀れなことだ。しかし、増えたとはきいていたけど、こんなところにも出るようになったのか」

「嫌ね。気持ち悪い。早いところで排除してもらいましょ」

「俺がやるよ」透が父親のライフル銃を取り出した。

「よせ。仰々しい。これでやれ」

憂はポケットからハンドガンを取り出し、それを次男に渡した。透はハンドガンの触感をしばらく楽しむ。前々から欲しいと思っていた。年齢制限はパスできる。しかし値段が少々高い。父親の持っているハンドガンでも五万は越えるだろう。弾は二十発入りで五円。月の小遣い一万円だと厳しい金額だ。

「憂黎、撃ってみるか？」

弟の憂さ晴らしになれば、と透は思つて憂黎にハンドガンを渡した。

憂黎は透と同じように手にした凶器をしげしげと眺めた。透と違い、顰め面になっている。

「弾は入ってる？」

「もちろんだ。けど無駄弾は撃つなよ」憂一が笑った。

憂黎は窓を開け、ハンドガン窓の外に突き出す。スーツの男の頭部に銃口を向ける。

おっと、その前に。憂黎は辺りに人がいないか確認する。大丈夫。問題ない。引き金を引いた。

銃声が響いた。小さな銃とはいえ、銃声音が小さいことはない。耳に響く音だ。

スーツ姿の男は頭に致命傷を受けたようだ。銃弾によって生じた穴から血を勢いよく流しながらアスファルトに腹ばいになっている。すでに息絶えているようだ。血が道路を赤く濡らしていく。

「いい腕だ」憂は息子から銃を取り上げた。

「一発で仕留めたわ。それでいいの。慈悲深い行為だからね」聡美は憂黎の頭を撫でようとし、憂黎は聡美の手をかわした。

「全く、物騒なことだ。まあ熊に襲われるよりはましかもしれない」車が再び動き出した。死んだ男を避けたが、血はタイヤにつき、しばらくは血の跡が付くことになった。それはまるで撃たれた男の、せめてもの報復のようだった。

「どうだ、ちつとは気晴らしになっただろ？」

「まあ、ね」

憂黎は答えたが、何も感じなかった。憂黎はハンティングを毛嫌いしているし、死霊を銃で撃つのも好きではなかった。

この時点ではまだ闇の脅威は彼らには見えていなかった。

一章 五話

休日が終わるといつものように学校生活が待っていた。

学校は退屈だ。憂黎はいつものように机で憂鬱そうにしていた。あまり社交的な性格ではない彼は積極的に友人を作ろうとはしなかった。しかし彼の不思議な魅力に惹かれるのは異性だけではない。彼の二つ後ろの席にいる戸辺凌は憂黎のことが気にいっていて、たまに話しかけていた。

「憂黎。キャンプはどうだった？」

凌が話しかけてくる。憂黎は凌のことが嫌いではない。しかし最近の憂鬱は友人と話すことすら億劫だった。

「肉はうまかったよ」

「そうか。今度俺達もどこかでキャンプしようかと計画してるけど、お前もどうだ？」

「考えとくよ」

といったが憂黎にその気はこれっぽっちもなかった。凌とは話すが凌以外のクラスメイトは話したことがない。一緒にいってもぎくしゃくするか、敵意を向けられるだけだ。だいたいクラスで評判がいいわけではないことは、わかっていた。

「ま、考えといってくれよ」

凌は離れ、間髪いれずに尾西香苗が憂黎の前に現れた。ショートヘアの真っ白な肌をした背の低い少女はいつも気さくに憂黎に話しかけてくる。

「具合悪いの？ 憂黎君」

「そんなことないよ。ちよっとぼうつとしてた」

憂黎は多少鬱陶しく思いながらも返事をした。女に冷たくして傷つけるのは嫌だった。

「チョコあるよ。食べる？」

香苗は憂黎が甘党のチョコレート好きだということを知ってい

る。しかし今憂黎は別段チョコが食べたいわけではなかった。

「ありがとう」

憂黎はチョコを貰って口に入れた。

「憂黎君はさ、いつも一人で帰るの？」

「そうだね」

その通りだがそれがなんだというのだろう。

「危ないよ。先生が言ってたじゃん。最近死霊たちが増えてるって。うちらも固まって帰るけど、憂黎君も一緒に帰らない？」

憂黎は香苗たちと帰る様子を想像してみた。一人のほうがずっと気楽そう。それに彼女たちと固まって何になるだろう。結局死霊に襲われれば撃退できるのは男の自分だけだ。それに一人ならあんな愚鈍な連中にはそうそう捕まらない。

子供の頃は、別だ。

「遠慮しとくよ。近いうちに銃も手に入るから」

これは本当のことだ。最近死霊が増加しているという話を両親は深刻に捉えている。兄弟全員にハンドガンを買うのもやむを得ない、という方向に話が進んでいるのを憂黎は知っている。

「あたしも銃買って貰っちゃったんだ」

香苗は嬉しそうな声を出した。「十万もしたみたいんだけど、すごいよ。あれなら簡単に死霊退治ができるよ」

「自分の身は自分で守るのが一番だよ」憂黎は適当にそう言っていた。

「そうはいつでも憂黎君、気をつけてね。一人は危ないよ。凌なんかでも一緒に帰ったほうがいいかもよ」

「そうかもね」

適当にあしらう。十万の銃か。どうせ一発も撃つことなく終わるんだろう。

二人が去ると静かになる。憂黎は周りの声を聞いた。このクラスでは死霊たちの話題がメインになっているようだ。

頻繁に出現する死霊に興味はあるが、どうせすぐに鎮火する話

題でしかないのだろう。憂黎は興味がない。銃なんて欲しくないし。

一章 六話

赤根薫は物憂いに耽る憂黎の後ろ姿を眺めていた。ため息が出る。彼は可愛い。だが自分のことなんで眼中にないだろう。

香苗への接し方を見る限り、香苗には興味はなさそうだ。当然よ。あんな女、憂黎君とは釣り合わない。

薫は自分の容姿に自信を持っていた。絶対なる自信、とはいえないが、そこそこ魅力的な外見を持っていると自負している。クラスでも一番の美人であるということを自覚していた。

高宮憂黎は初めて顔を見たときから目を付けていた。今のところ熱をあげている女の影はない。早いところものにしたい。だけど、ガードは少し固そうだ。

獲物を狙う肉食獣のように彼女は憂黎の背中を凝視した。

周りの声が鬱陶しいが、その中に死霊という単語がちらほら聞こえてくる。

死霊か。彼女は思った。

使えるかも。

一章 七話

透は帰宅途中で死霊を二匹見た。やはり、虚ろな様子で道を頼りなく歩いていた。

銃はある。光と一緒に買ってもらったハンドガンはズボンのポケットに入っている。

死霊の頭に狙いを定め、銃弾を放つ。轟きと共に死霊は倒れた。それからふっと消えてしまった。

「Aタイプかよ」

同じクラスの矢口健太が顔を引き攣らせた。

「当たり前だ。人を撃つよりましだろ」透は弾を補充し、銃をしまった。

「だけどよ、ゾンビとは違う。連中、どこから現れるんだろうな？」

「悪魔はどこからだって現れるんだ」

そう、悪魔だ。神出鬼没の、悪魔たち。悪霊。鬼。全てが不気味な存在。

もう一匹はそこから少ししか離れていない場所にいた。女の死霊だ。赤いTシャツに白いカラーパンツを穿いている。服は真新しそうだ。Bタイプだが、彼女は運が悪かったようだ。

透はじつくりと観察した。一見、人のようにも見える。元々は人なのだ。踵の高いサンダルを履いてぎこちなく歩く様子は滑稽ではあるが、やはり死の臭いを放ち、うつすらと恐怖感を覚える。

「Bタイプだぜ。珍しいけど、なんだか人間のほうが気持ち悪いよな——今度は俺にやらせてくれよ」

健太は銃口を死霊に向けた。

透は健太の銃を羨ましがった。なかなかの銃だ。最安値な三万程度の自分の銃の何倍する値段の銃だ。健太には勿体ない代物だ。一人っ子は得だと思った。

音は透の銃より絞られていた。それでいて透の銃より高威力の弾

が出る。それをくらった死霊は倒れ、死体はそのまま動かなくなる。
「ご愁傷様」

「最近は死霊になる人も滅多にいないのにな」透はだんだんと動かなくなっていく死霊を哀れみの目で見た。

透は幼年の頃を思い出した。公園で遊んでいると、唐突死霊が現れた。初めて見る死霊は映画やゲームで見るゾンビと動作がよく似ていた。ほかの幼児たちが泣き出す。透も怖かった。ただショックを受けて呆然としていた。失禁したのはそのときが初めて最後だ。

あの頃は、意思疎通もできない不気味な動きをする存在に畏怖を覚えたものだった。だがそれは今でも変わっていない。得体の知れない畏怖のようなものは、今でも感じる。

石を投げ付けて撃退した時代もあった。肩のいい透が全力で石を投げればかなりの威力になる。透の投げる石は弾丸石とよく友人に言われたものだった。

バットで撲殺したこともある。初めはクラスの仲間と一体の死霊を五人で囲み、袋たたきにした。勢いよく振り落とす金属バットや木刀は石以上に強力だ。

そして今は銃だ。一発で死霊を仕留めることができる殺傷性の高い武器。これさえあれば死霊も怖くない。幼ごころに感じた恐怖の対象も、これさえあれば問題ない。

「どうした、びびったのかよ？」

健太がにやけている。

だけど今は死霊狩りなんて興味がなくなってきた。

「何でもない。帰ろう」

一章 八話

憂黎は下校するとき、誰かと一緒に帰れと生徒指導の腹の出た教師に注意を受けた。

「さもなきや先生の車に乗ってくかだな」

煩わしかった。早く帰りたい。家ですることといつてもたかがしれているが、それでも早くここから去りたかった。

「憂黎君は私と帰るんです」

透き通った声に思わず振り返る。

赤根薫が、そこにいた。憂黎は彼女をよくしらなかった。会話は一言も交わしたことがない。

「なんだお前ら、そんな関係だったのか」教員はにやけ顔になる。

「そうです」薫はにつこりと笑みを浮かべ、明るく答えた。

「先生ちつとも知らなかったよ……だけどな、二人だけじゃ心もないな」

教師が心配すると、薫はスカートのポケットから何か取り出した。銀色に光る、見事な銃が出てくる。

「これでもですか？」

教師は難しい顔をした。明らかに銃に対して嫌悪の気持ちがあるのが見て取れた。

「変な時代だな。登下校に生徒が銃を持つなんて。何年経ってもいまだ慣れん」

「二十年前とは違いますよ、せんせ」

教員はため息をつく。

「くれぐれも気をつけてな。銃の扱いにも」

「大丈夫。教わったことは厳守します。さ、帰ろう憂黎君」

校門をくぐり教師の姿が見えなくなると憂黎は立ち止まった。

「本当に一緒に帰るの？」

「そうだよ。先生のいうとおり、一人じゃ危険だよ。一緒に帰った

ほうが いいんだよ」

「君、家どこなの？」

「今泉だよ」

「全然別方向じゃないか」

「駅まで一緒にじゃない」

なら駅まで同行することにするかと諦める。たいした距離ではない。

歩きだす。薫は憂黎の隣に立った。端から見れば若い恋人同士にしか見えない。なんだか嫌な感じだと憂黎は思う。一人でよかった。薫は美少女ではあった。白い肌、はつきりした目。うっすらとした唇。長くツヤのある髪はいい香りがする。スカートから出る脚は長く、全体的にすらりとした印象を受ける。

目があうとにつこりと微笑みを浮かべる。

「いつもは誰かと一緒に帰るんだろ？」 憂黎がたずねる。

「クラスの友達とは一緒に帰るよ。大体部活があるからそっちの仲間と帰るかな」

「何部？」

「バレー部。今日は気分が乗らないからさぼっちゃった」

バレーか。活発なほうなんだな。スポーツなんてしなさそうな印象だが、違うようだ。しかし部活をさぼるような人間には見えないが。

「憂黎君は銃持ってないの？」

「ないよ。いらないんだ」

「なんで？ 危険じゃない」

銃か。銃ならすでに親から貰っていた。あまりいい銃ではないと透は愚痴っていた。光はどうでもよさそうだった。彼は自分のことを無敵だと思っているのだ。死霊に対して恐怖心なんて抱いていないのだろう。

憂黎は銃を持たなかった。学校にいくとき、銃をホルスターにいられた。しかしふと、思い直して、ホルスターごと机に置いて登校し

た。

代わりにポケットにナイフを忍ばせた。戦闘用に作られた鋭利なナイフだ。

銃のほうが遥かに安全で確実なのに、なぜナイフを選んだのか、よくわからなかった。だが、なんとなく思ったのだ。それが理由なのだろう。

群れてよってたかつて死霊を袋だたきにする光景を、何度か見たことがある。それを見ていつも思っていた。そんなのは卑怯だ。ただのいじめじゃないか。

だが死霊は人を襲い、殺す。卑怯などと戯言を言っている場合ではない。

しかし憂黎は嫌だった。集団で一匹を叩くというのが受けつけなかった。

「銃はいらない。これがあるから」

ナイフを取り出し、薫に見せた。どこか誇らしい気持ちになる。

ナイフはいたく憂黎のお気に入りだった。

「ナイフ？　こんなの駄目だよ」

薫は不快な顔をした。

「駄目？」

「こんなの危ないし、第一野蛮だよ。こういうのって、憂黎君には合わないと思うな」

憂黎はひどく不愉快な気分になった。この女もそこの女と一緒に。自分の感覚など理解できないのだろう。

しかし、まあ、相手は女だ。刃物で切り付けるといふ行為が野蛮だと感じるのも当然かもしれない。

憂黎はナイフをしまった。

「どっちみち死霊なんてでくわさないよ」

「本当に出たら怖いよ。銃なんて使いたくないし。出たら憂黎君、守ってくれる？」

「いい銃は使わないと宝の持ち腐れだよ。俺のナイフじゃ、不安だ

る」

「そんなことないよ」

薫は少し困惑した顔をした。

駅についた。ここからは別々だ。

「じゃあこれで」

憂黎は別れの挨拶をするとさっさと薫と別れた。残された薫はぽつんと立ち尽くしていた。

一章 九話

電車の中、憂黎は流れさる窓の外を見ていた。気分はよくない。この退屈な世の中のどこに、抑圧された思いのはけ口を見出だしたいのだろう。

考える。何故、こうも世界は冷たく、人は何故、孤独なのだろうか。或は自らを独りに追いやっているだけなのか。憂黎にはわからなかった。いつから自分はこんなにも寂しい人間になってしまったのだろう。

いつから。そんなことはわかつている。あのときの暗闇を見たからだ。そして、その暗闇はいつまでも自分の周りを覆っているのだ。決して消えることはない。

家に帰ると母親がキッチンから声をかけてくる。

「憂黎？ おかえり」

「ただいま」力なく返事をする。

「帰ったか」

居間には透がいた。期末試験が近いからか、いつもより帰宅が早い。

「光兄も今日は帰るってよ」

「珍しい。別にあんなやつ帰ってこなくてもいいけど」

光は常にテンションが高く、馬鹿な言動が多い輝は憂黎には鬱陶しい存在だった。

「まあまあ。あれもたまにはいいいだろ。風呂入ってこいよ。親父も帰ってきたら飯だ」

「わかった」

いつも家のことを仕切るのは透だ。不思議なことに憂黎は透の命令には逆らわない。特に反発する理由もない。透は親と息子の橋渡しの存在でもあるし、悩みにも相談に乗ってくれる。気に入らない

ことも多々あるが、頼りになる兄貴といえよう。

透にいわれた通り風呂に入ることにした。シャツを脱いで洗面所の鏡の前に立つ。背は少し高いが、痩せた体だ。鍛えなくては。身体を作る。なぜか、それが必要な気がする。ズボンを脱ぎ、ポケットからナイフを取り出す。ナイフの研ぎ澄まされた美しさを引き出したという奇妙な欲望に駆られる。学校では銃の撃ち方を学んだ。勿論、簡単にだ。ナイフの扱いは学ばなかった。近接武器を軽視する学校側のやり方に憂黎は腹が立った。

鏡に映る自分の顔は確かにいい顔立ちをしているかもしれないが、憂黎は虚しくなる。顔が整っていても、慰めにはならないのだ。クラスの女子に持て囃されても、自分が好きな相手に振り向いてもらわなければ意味がない。果たして、そんな相手はいるのだろうか？
どいつも顔だけで寄ってくるつまらない女ばかりだ。

ナイフをしまい、風呂に入った。

家族団欒は光と憂の喧嘩で終わった。今日の光はいつもほど機嫌がよくなり、そして父親もまた不機嫌だった。二人は互いのストレスを発散するかのように口論し、結局食事はあまり楽しいものにはならなかった。憂黎は食べ終わるとすぐに部屋にいき、寝た。

「全く、生意気なガキだ」

妻と二人だけになると憂は愚痴をこぼした。

「あれだけ遊び歩いて、まだ家を開放しているだけ有り難いと思うのが普通だ。それをあいつはわかってない。自分のことを王様だとも思ってるのかね」

「まあね。でも光もあと一年で無事卒業だし。そのときには就職して苦労を味わってるんだから。今だけ甘やかしてもいいんじゃない」
「また留年しなければな」

「大丈夫。出席もちゃんとしてるし、落第点もとってないし」

「就職しても家を出るかどうか」

「あの子の性格から絶対に家を出るから。そしたら少しは寂しくな

るかもよ。それにね、あんまり勝手してたら透が怒るから。透には光も憂黎も一目置いてるから」

憂は笑った。本来それは自分の役目だというのに。

「明日からまた出張だ。夜に電話するよ」

「こっちは大丈夫。気をつけていつてきてね」

まあなんにせよ、家族全員で食事をしたのだし、よしとしよう。憂はそう思いこむことにした。

一章 十話

憂黎が学校にやってきた。薫はつい目がそつちにいつてしまう。相変わらず憂鬱そうだが、その顔は美しかった。

昨日は会話が弾んだとは思えない。おそらく憂黎にとって自分は香苗よりも印象が薄いかもしい。そう思うと気分が滅入る。思わずため息が出た。恋患いとはまさにこのことだ。夢にまで出て来る。心の底から惚れてしまった。なんとしても振り向いてほしい。そうこう思っていると、急に妙案が浮かんだ。

「憂黎、お前どう思う」

昼休み、加藤稔が声をかけてきた。

「俺はいいよ」

憂黎は否定した。

「なんでだよ、付き合い悪いなあ。絶対楽しいぞ？」

憂黎は上手い言い訳を考えた。

「一人でやるのが好きなんだ」

谷口幸平が口笛を吹く。「変わってるなお前」

「まあね」

「ま、いいよ。一人でやれよ」

男子生徒たちは去っていく。憂黎はやれやれと思う。どうせたったの一匹の死霊を複数でよってたかってなぶり殺すのだろう。そんな情けない真似、出来るはずがない。

「どうしたの？」

香苗が憂黎の机に手について話しかけてきた。彼ら血に飢えた者たちとの会話が気になったようだ。

「死霊退治に加わっていうんでしょ？」

香苗の横にいる西野美遥は短髪の香苗とは違い長い髪を茶色く伸ばしている。外見の印象は違うが、どちらも明るく、そして憂黎

を好いていた。

「男子は好きだねえ。あたしはそんな野蛮なことできないよ」香苗が言う。

「憂黎君はやらないでしょ？」

初音の質問に憂黎は首を振る。

「あんまり愉快的な遊びじゃないね」

「残酷な遊び……あたし先生にチクっちゃおうかな」香苗が提案した。

「先生が何をいつてもやるよ。みんな最近銃を手に入れた。それを合法的に撃つことができるんだ。死霊を駆除すれば町の平和にも繋がるし」

「でも、生き物を遊び半分で殺すなんて酷いことだよ……ねえ？」香苗は美遥に同意を求めた。

「そうだけだね。あいつらも血気盛んな若者だから。それに猟師だってそうじゃない？ 半分スポーツ感覚で動物を殺してる。その動物の肉を食べたり毛皮を売ったりしてるけどさ」

「そりゃあ猟師とか出してこられたらね」

憂黎は二人のやり取りがありきたりだが、どこか楽しくもあつた。二人は真剣に死霊を狩ることについての道徳性について議論している。そんな二人なら、死霊を遊び半分で殺すような蛮行に及ぶことはないだろう。

「憂黎君も銃は持ったほうがいいよ」香苗が憂黎を心配した。

「そうだな。物騒だしね」憂黎はそう返した。銃を持つ気にはならなかったが毎回こんなことを言われるのはかなわない。形だけでも持つべきかもしれない。

帰宅するときにクラスの男子連中がこぞってどこかへ向かうのを憂黎は目撃した。意気揚々としたその姿はどこか頼もしくもある。彼らとしては、世に害をもたらす悪を退治してやろうという気持ちでいるのかもしれない。

まあ、関係ない。憂黎にはどうでもいいことだった。一瞬感じた不快感もすぐに消えた。

一章 十一話

狩場は決まっていた。死霊がもつとも出ている鐺木町。学校から二駅離れた場所だ。彼らはバイクを持っている。持っていないものは後部座席に乗り込む。

あわせて八人。加藤稔は先陣を切ってバイクをスタートさせる。目的地はそう遠くない。三十分もあればつく。谷口幸平もすぐ後に続く。他の六人も全て憂黎のいる二年B組の生徒だ。

途中、幸平が警笛を鳴らした。他のバイクが止まる。

「どうした？」

幸平は仲間の質問に指を指すことで答えた。幸平の指した場所には死霊が一匹いた。

「誰が撃つ？」辻井秀が言った。メンバーの中でも特に死霊を撃つのが好きな彼は小さく鋭い目を光らせる。

「俺に任せろって」

門口慎が銃口を死霊に向けた。

全員が息を飲む。死霊は顔は中年男のようで、ふらふらとした足で歩道を歩いている。青白い横顔はその名を表すに足るものだった。まさしく死霊だった。

銃声と共に男の頭部に穴が開いた。倒れるまで少し時間がかかった。血は出なく、煙と共に消滅していく。

「こんなところに死霊が出るなんてかなり久しぶりだってな」

何事もなかったように慎は言った。

「だからいんじゃない。いっぱい撃てるぜ。次見つけたら俺に撃たせろよ」

彼らは再びバイクを走らせた。

目的地につく。辺りはまだまだ明るいが、狩りをするなら早くしたほうがいい。

のどかな町には寂れた商店街がある。店はところどころシャッター

ーが閉まっている。車は通りすぎるが歩いているものはほとんどいない。

三体の死霊がその商店街をうろついている。

「さっそくかよ」辻井秀は目を輝かせて一匹の死霊に狙いを絞った。露出の高い服の若い女。死霊の犠牲となったBタイプの死霊だ。普通の死霊よりも恐ろしい存在といわれている。

一発撃つ。死霊の首に当たったが、死霊は倒れない。撃たれた死霊が彼らに気付いた。

続けて撃つ。今度は首の下。死霊は動じない。

「頭だろ！」見兼ねた稔が叫ぶ。

さらに一発。今度は顔面。鼻が潰れ、実に醜い、化け物じみた顔になった。もう一発。ようやく脳に損傷を与えることに成功する。死霊は倒れた。何の感慨もない。マネキンを撃つようなものだ。

残る二体のうちの一体が彼らを感知し、近づいてくる。目に狂気と殺意を宿した死霊は細身で、貧弱そうに見えた。

「俺にやらせてくれ」

幸平が銃を構える。

「一発で決めるよ」稔がプレッシャーをかける。

銃声音。胸元に当たる。しかし相手は倒れない。間髪いれず二発目を撃つ。頭部を撃たれた死霊は簡単に倒れた。

「やっぱ頭撃たないとすぐには死なないんだ」幸平は感心した。

「次だ。誰が撃つ？」稔が問う。

「全員で撃とう」

この中では一番大柄で日によく焼けた黒顔の沼田洋二が提案した。全員その案に賛成した。一斉に死霊に銃を向ける。八発の銃声はあたりにうるさく鳴り響き、蜂の巣にされた魔物は崩れるように倒れ、身体から蒸気を出すかのように溶けだしていた。

「派手にやりすぎた。場所変えよう」

稔の意見を退けるものはいなかった。バイクに乗って走りだす。こんなに楽しいことはあるだろうかと彼らは考えていた。――もっ

と出るよ化け物ども。端から殺してやる。
稔は風を全身に受けながらほくそ笑んだ。

一章 十二話

憂黎は一人で帰った。薫と一緒に帰りたそうに校門で待っていた。「今日もあたし一人なの」薫はそう言った。

「銃があれば大丈夫だろ」憂黎は冷たく返した。同情を誘うような言葉に苛立った。なので、憂黎は一人だった。薫のことで後悔はしてなかった。憂黎の心は深く沈み、誰かに対して心を痛めるゆとりなどなかった。

空は茜色で綺麗だった。まだまだ明るく、そのまま家に直帰するのはためらわれた。そんなふうに感じるのは憂黎にしては珍しかった。ふわりと吹く風は心地悪いとはいえない。

だが気分は滅入っていた。学校だ。学校が、自分を憂鬱にさせる。登校拒否したいが、それはためらわれた。つまらない学校に通い、つまらない授業を受けるというのが実にくだらないことか。気安く話しかけてくる女子共も、本当は鬱陶しいだけの存在にすぎない。だが今のところ我慢している。

空を飛ぶ鳥になりたい。そうすれば、この無意味な世界ともおさらばできるのに。だが鳥になっても同じことだ。虚無感によって地面に落ちていくことだろう。

いつもと違う道を、憂黎は歩いていた。ここからでも駅にはつくが、大分遠回りになる。たまにはいいじゃないか。憂黎はよく知らない、人通りの少ない狭い道を進んだ。左右を石垣の壁に囲まれた通路は人とすれ違うのがやつとの広さだった。民家があるわけだが、古臭い家はどれも人の気配を感じさせず、夕闇と相俟って不気味な雰囲気を作り出していた。少し先に見える突き当たりからは右側にしかいけないようだった。

死霊と出くわしたのはそれから角を曲がってすぐだった。夕日を背景に、太めの頭髪のない男が道の真ん中に立っていた。くたびれたＴシャツを着て、くたびれたジーンズを穿いている。Ｂタイプの、

死霊の犠牲者だった。

「消える」

怯えることなく憂黎は言い放った。勿論、死霊が消えるはずもなく、ふらふらとした歩き方とは裏腹に凶暴な目を向けてきた。

ナイフをポケットから出して、死霊にちらつかせる。

「消えろって」

効果はない。憂黎は少し怯えはじめていたし、後悔もしていた。道を変えたこと。銃を引き出しに置いて登校したこと。目の前にいる死霊はタイプCだった。

ふと、思った。学校の連中はこの目の前の怪物を、よってたかつて殺す。ナイフのようなちっぽけな近接武器でない、銃で。

なら、たった一人で一匹の死霊を相手どるのはどうだろうか。それも銃を使わずにナイフでだ。

それは勇気がいるし、わりと公平な闘いだ。そう、闘いだ。虐殺じゃない。

死霊が襲いかかってきた。相手を視認した死霊はふらつかない。スピードは人に落ちる。しかし力も同様だ。そしてこれはタイプCの死霊だ。この手の死霊はのらくらした銃の練習台ではない。恐ろしい相手だ。山で出くわす熊や、訓練された警察犬ほどではないにしても。

憂黎には死霊の襲撃は十分驚異だった。だが、予想できる行動でもあった。ナイフを振って死霊に切り付ける。死霊は痛みに鈍感だ。切れた手から血がでようととも気にしない。

腕を掴まれるが憂黎は振りほどいた。ナイフを落としてしまったがすぐに拾う。

死霊はじりじりとにじり寄ってくる。そして、両手を広げて憂黎を捉えようとした。

死霊が憂黎を捉えることはなかった。その前に、憂黎は死霊の心臓にナイフを突き刺していた。ナイフは深く刺さり、確実に致命傷となりえるものだった。煙のように、死霊は蒸発し、消えた。

ナイフが道路に落ちた。狭い路地での憂黎の闘いは、辛くも勝利に終わった。

ナイフにはかすかに血の跡がついている。赤い血の跡。気にせずポケットにしまう。

「勝った」

憂黎は呟いた。どこか放心状態の彼だったが、次第に全身を震わせた。勝利の喜びのようなものを感じた。電気が貫くような不思議な感覚。

辺りは薄暗くなりはじめていた。このままここにいれば宵闇を待つことになるだろう。憂黎は足を動かした。身体はやけに力が漲っていて、そのまま走りだしそうだった。ややこしい道を適当に進むと、駅近くの見知った大通りに出た。

手がいまだに震えている。死霊を殺した。銃を使わずに。

なんだかやけに嬉しかった。

「なんかいいことあったのか？」

夕食のとき、透が憂黎に聞いた。

「別になにもないよ」わかるのかなと憂黎は感心した。実際、気分はいい。こんなに気分がいいのは生まれてはじめてかと思えるほどだ。

部屋にいく。机の上に乱雑に置かれたパンフレットを見る。その中には死霊ハンターなるものもあった。求む！ 若き力。などと書かれてある。憂黎はそれらをゴミ箱に捨てた。くだらない。ハンターといっても、連中がやっているのは何の抵抗もしない、逃げるくらいしかできない獣を撃つと同じことだ。クラスの連中と同じレベル。一方的な惨殺。

そんなものに意味はない。せいぜい日頃のストレスを発散させるだけのもの。そんなのでは、魂は何も刺激を受けない。暗闇を抑えることはできない。

憂黎はナイフの柄を握りしめた。これから長い相棒になるだろ

う。こいつで、俺流の狩りをやってやる。憂黎は機嫌がよかった。

一章 十三話

水島直弥。みずしまなおや 狂犬といつどこかありふれた安っぽいあだ名を使うものは滅多にいないが、一度金属バットで他校の敵対する生徒数人を

病院送りにし、死霊のせいだと大胆な言い訳をし、そして停学だけですんだという前科を持つ。昏睡状態になった生徒は復活したが、脳に障害を負ってしまった。

留年していて、憂黎の兄である光と同一年で、光の所属するバイクグループとは因縁浅からぬ仲であり、対立していた。彼はグループリーダーではない。四十人いるメンバーのなかではまだ若いほうではあった。だが殺人さえ厭われないような狂気は、彼を不気味で近づきがたい、恐れられる存在にしていた。

水嶋直弥は狂っている。それがメンバーの直弥に対する結論だった。狂犬は本人を満足させるため。陰では酷いあだ名を沢山つけられていた。

しかし目下のところ、彼の趣味は死霊をいかに楽しく惨殺するかにあった。彼らは他のバイクグループとの争いをやめ、最近頻繁に出没するようになった死霊退治に専念していた。その退治の仕方はなかなか凝っていて、銃はなるべく使わない。バイクに鎖で首と手を繋いでおいて街中を引きずりまわすのはオーソドックスで彼らの氣に入りのやり方だった。痛みに鈍感な彼らとはいえ、痛いことは痛いようだ。苦悶の叫びは人間の切なる悲鳴と比べてどこか滑稽だが、それにしても傍から見ると一般人にしては見るも無惨な光景に見えた。直弥は死霊の殺し方を考える達人で、ありとあらゆる拷問のやり方を見つけては死霊に試していた。水責めは幾らやっても飽きなかった。木に縛り付けて火をつけて燃やしたこともあった。縛らずにそのまま火をつけて暴れる死霊を見て楽しんだこともあった。縛った死霊の首を並べて鋸で切り落とすこともした（骨が固くなかなか落とせなかった）。まるで日本刀の試し斬りのように。

そんな彼は自分が少し周りとは違うということを心の奥底では感じていた。しかし表層の彼はそんなことは知らなかった。周りは直弥のことを奇異な目で見ていた。直弥はそれが心地よかった。直弥が唯一残念なのは人間を殺すことができないこと。邪魔な人間はいくら殺してもいいと思うが、刑務所にいくのはいやだった。心底いやだった。自由に好きなことができないなら生きてる意味がない。彼はそう思っている。

憂黎はバイクを走らせる水嶋直弥を目撃した。バイクグループに入ったのは不良の直弥らしい。制服だったのを見ると、どうやら一応高校に行くことはできたらしい。だが所詮屑は屑。特に奴は社会の癌的存在。無駄に酸素を消費する蛆虫だ。

心の中では憂黎は怖かった。情けなくも、昔の記憶が蘇る。

昔とは違う。そう心に言い聞かせるが、奴は普通じゃない。水嶋直弥。あいつのことは思い出したくないが、記憶はそう都合よく過去を忘れてはくれないようだった。いつかは不愉快な過去も単なる思い出に変わるのかもしれない。

しかし水嶋直弥。あの顔を忘れるのは長い時間がかかりそうだ。

さて、と憂黎は辺りを見回した。人は多いが、死霊はいない。裏通りに入るとナイフを構えた。

直弥なんて恐れてられない。もっと恐ろしいものと戦っているんだから。

一章 十四話

薫は変わらず憂黎の背を見ていた。半分諦めようとしたが、やはりどうしても諦めきれない。だが再度接触を試みるのは躊躇われた。思った以上に手強い相手だ。だが全く眼中にない、というわけでもないはず。ポジティブに考えよう。顔、スタイルは男ならいいなと思う部類にいるのは確かなはずだ。だから、次のチャンスがあれば彼に再度接してみよう。

チャンスは自分で作るものだ。

手鏡を開いて覗く。淡い化粧が自分の美しさを引きだたせている。可愛い。こんなに可愛いのに……。手鏡を閉じ、恨めしげに憂黎の背中を睨んだ。

放課後。憂黎は校門で薫に絡まれた。

憂黎は薫がまたしても自分と帰ろうと言い出すのではないかと思っただ。

「一緒に帰らない？」

その通りだった。

「いいよ……駅までだね」

冷たくあしらうのは躊躇われたので、憂黎はそう言った。

二人は横に並んで歩いた。

憂黎は照れ臭かった。何故彼女は自分と帰りたがるのか。だが理由は明らかだ。

「憂黎君と帰るの二度目だね。なんか嬉しい」

薫は本当に嬉しそうだった。憂黎は積極的な彼女をどう扱ったらいいものか考える。

「あいつら、滅多に出てこないだろ？」

「死霊？ うん。見たことない。一部の女子は沢山出るとこ知ってて、撃ちにいつてるらしいよ」

女子も男子と似たようなことをするのがいるらしい。

「興味あるの？」

「興味ない。こうやって憂黎君と帰るほうがずっと楽しいもの」

「俺なんて面白くないよ」

「そんなことない。すっごく楽しいよ」

少女の屈託ない笑顔は心底そう思っているものだった。憂黎は困惑した。この娘は自分への好意を隠さない。

少女はどうみても可愛く、プロポーションもよかった。だが……。

「死霊狩り、始めたんだ」憂黎はぼそりと言った。

「え、憂黎君も死霊退治なんてやってるの？」薫は驚いた様子だ。

「やってる」憂黎は短く返事した。

不気味な沈黙が流れた。「そんな野蛮なのって憂黎君らしくないよ」

どこか非難するような口調。薫の顔は、見損なったとでも言いたそうだった。

薫の言葉は憂黎には暴言のように響いた。

「俺らしくないって、そっちが俺の何を知ってる？」

まただ。薫は焦った。また失敗した。憂黎君を怒らせてしまった。

口は災いの元。

だけど本当にそう思った。どこか刺があるけど、繊細そうな憂黎君。

だけど酷い。すぐに怒る。まるでこちらの言動を逆手にとって自分から離そうとする作戦のよう。

いや、彼はそうなんだ。誰であっても刺を持って接する。きっと

……きっとそれは彼の防衛本能なのだろう。

ここでたじろいでは、彼の心は掴めない。

「ごめんなさい。あたし、勝手な思い込みで憂黎君を見てた。憂黎君は男だもん。死霊狩りも当然するよね。変なこと言ったねあたし。怒った？」

憂黎は彼女の謝罪にたじろいだ。怒りも吹き飛んでしまった。

駅は近い。死霊は……どこにいる？

「いや、あの、ごめん。気にしないで。帰ろう」
「うん」

薫はにっこりと笑った。

今日はやめておこうと憂黎は判断した。そんな気分ではなくなってきた。

一章 十五話

水嶋直弥はバイクで暴走していた。一人だったので気兼ねなく暴れることができる。今日はいつも以上に気分が爽快だったのでスピードもいつも以上だ。

違うグループがたむろしているのを発見する。数は小数だが態度がなっていないようだ。少しお灸をすえてやらなければ。この辺りのボスが誰かということをはからせてやるのが自分の義務だ。停車し、金属バットを持って殴りこむ。

相手のバイクグループにとっては突然の衝撃だった。急に男が現れたと思ったらメンバーが打撃を負って地面にうずくまってしまっている。

グループリーダーは対処しようとしたが、襲撃者の動きは速かった。右手が痺れる。鈍痛。それから目で右手を視認。骨が折れていた。

悲鳴と共に、直弥はバイクを走らせその場を去った。彼は走りながら笑っていた。

やはり人をいたぶるのが一番面白い。

透は、思うに今回の出来事は全て何かの前触れなのではないかと考えた。死霊の数はまた減少した。しかし死霊狩りは未だに人気の遊びとなっている。これだけ楽しい遊びは他にはないと豪語する輩も中にはいる。

透としては、とにかく安全に登校できればそれでよかった。どこか残酷な小中学生のときとは違い、死霊を撃つことに嗜虐性を感じることはない。そういえば憂黎はそんな自分をどこか不気味に感じていたようだった。あいつは死霊を殺すことに躊躇いがあるようだった。それが普通なのかもしれない。習慣的に死霊を殺すことは間

違った行為ではないのだが。

ほんと肩に手を置かれた。振り返る。中村美音がいた。振り返るまでもなく見当はついていた。

「何難しい顔してんの？」

「ちよつと考え事だよ。美音こそ何やってんだよ。学校から家まで徒歩五分のくせに駅にくるなよ」

「買い物だよ。今日お母さんがいないからさ、夕飯自分で作らないといけないんだよね」

「料理なんて作れんの？」

「結構得意なんだよ、こうみえても。二年ほど付き合っただけあたしの全てを知ったつもりになってんの？」

透は苦笑した。

「そんなに思いつてはないけど」

二年付き合つてもキスくらいしかしたことのない関係だ。たかが知れてる。だけど、透は今でも美音のことを友達以上に想っている。

「今からスーパーに？」

「歩いていける所だとあんまりいい食材がなくて」

「ふうん」

透は思った。相変わらず活発そうな雰囲気は変わらない。セミシヨートの彼女は付き合っていたときにはロングだった。高校にあがつてから髪を短くした。

前よりも似合っているな。快活さが上がって見える。

電車がきた。彼女はそれに乗り込む。

「じゃあね」

手を振る美音に透も答える。

去っていく電車にを見ると寂しい気分になった。

死霊の出没の場所は特定されていなかったが、最近ではある一定の条件があるということがわかってきたようだ。ニュースでやっていた。

死霊はどこからくるのか。何故、人を襲うのか。それらが解明す

る日があればいいかと透は思う。

とにかく、家族や仲間への危害が及びのは絶対にごめんだ。

一章 十六話

一体の死霊は何か哀しいことがあったに違いないと同情してしまつような顔付きをしていた。しかしその顔付きとは関係なく襲いかかってきた。

薫が風邪で休んだのは幸いと言えた。帰り道に再び前と同じ道を通り、死霊に出くわしたのだ。

死霊のは肌色は人間の肌に似てるが、無機質なものを思わせる。全裸のようで、その体は人間と酷似しているとはいえ、人間とは違い生殖器のようなものは見られない。

襲い掛かる相手にナイフを腹に深く突き刺すと、あっけなく倒れた。死霊の体はすぐに気体になる。

あつけないなと憂黎は拍子抜けした。こんなにも簡単にやつつけてしまつては意味がない。

だが、勝ちも勝ちた。ナイフなどで相手をするのは大の大人でも充分すぎるほど危険な相手に勝つたのだから。

死霊は完全に消えた。戦歴は自分と、ナイフの刃のみが知っている。憂黎は一人、悦に浸った。

だがやはり死霊はまだまだいる。マスメディアは死霊が減つたと流したが、それは間違いかもしれない。

やはり間違いだと憂黎は思った。奥からくる人間。人間だと思つたのはさすがに一度に二体はでないだろうと思つていたからだ。だが甘い考えだつたようだ。まだ影しか見えない存在は、明らかに拳動がおかしい。

パーカーのフードを目深に被り、顔がよく見えない。距離もまだかなりあつた。

ゆっくりと相手は向かってくる。迎え撃つ気だつた憂黎は躊躇つた。死霊だと思つた。しかし今こちらに向かつてくる相手は死霊特有のふらつぐない。ふらつかない死霊など見たことがない。

近づいてくる相手はまともな人間のようにはつきりした足どりだ。では人間ではないのか。そんな疑問が頭をよぎる。

しかし、憂黎には予感があった。あれは間違いなく人間ではない。死霊だ。あれは、死霊だ。

そのとき憂黎は相手の正体を察した。察すると同時に憂黎は逃走に転じた。いきなり全力疾走。かなり走った後に背後を見る。

そこには何もいなかった。憂黎はほっとした気分の後に激しい怒りを感じた。こんなのはフェアじゃない。ちきしょう。

フードを被った死霊。ただの死霊ではない。憂黎は死霊の種類を熟知している。タイプCの死霊だ。

憂黎の怒りはまだ近くにいてもかもしれないという恐れに変わった。再び走り、大通りにでると安心した。手に持っているナイフはすぐに隠した。

一章 十七話（前書き）

ちよい長い

一章 十七話

憂黎のクラスの男子グループも死霊退治に夢中になっていた。

しかし最近世間を騒がせる暴走族のことが気になっていた。連中は派手に死霊退治で暴れ回っているようだ。とばかりをくうのは避けたい。隣のクラスの生徒が死霊退治に熱中していたところに襲われたらしい。そのグループはかなり狂っていることで知られている。ほとんどもが病院送りになったが、重傷を負ったものがないのは幸いだった。

なので、死霊退治もあまり大々的にやるのは控えるようになった。場所も変えた。人気スポットから離れたところで死霊が多く出没する穴場を探すのだ。

「おい見ろよ！」

幸平が叫ぶ。バイクが止まる。

死霊が一匹うろついていた。女の死霊でソバージュをかけた美人の死霊だった。

「いい女だな」門口慎がにやけた。

辻井秀は銃を死霊に向ける。「だけど化け物だぞ」

「おっぱいでかいな」門口慎は性欲に突き動かされている。

「死霊をレイプなんかできるかよ」沼田洋二はせせら笑いをした。

「結構需要あるみたいだぜ？ 縛ってやりまくるの」慎はにやけている。

「本気かよ」幸平が呆れた声を出す。

「冗談だよ」慎は女の姿を死霊を撃った。死霊はなす術もなく崩れ落ちた。

「死霊とするほど困ってないね」

「いこうぜ」稔は力なく言った。死霊狩りもどこか馬鹿らしくなってきた。最近、少しだけ思う。結局、ただの弱いもの虐めじゃないのか。

走り、いつもとは違う場所にたどり着く。死霊が出るという噂を
たまに耳にするとところだ。

「汚らしい場所だな」洋二が感想を漏らした。

目の前に大きな廃ビルが建っている。右隣には高いが、汚らしい
アパート。そして民家がまばらに並んでいる。

廃ビルはもうほったらかしにされて二十年は経っているのではな
いかと思うほど、色褪せて見えた。

「あそこに入るのか？」秀が怖がった。

「馬鹿。廃屋巡りにきてんじやないんだよ」幸平が秀に言った。

「死霊はここらにいるはずなんだよな」稔は言った。

「噂が正しければだろ……まあいいや。バイクを降りて、各人で死
霊探しするのはどうだ？」

幸平の意見に稔が反対する。「一人は危険だから駄目だろ。六人
いるんだ。三人一グループで二つに別れよう」

「いいな。どうやって振り分ける？」

稔は適当に決めた。稔と秀、それに慎のグループ。幸平に洋二に
市瀬楓のグループ。

「決まりだな。じゃ、俺達こっち見るからお前たちそっちね」

幸平はそう勝手に決めると他の二人を引き連れてどかかへ行った。

「俺達はどうするか。なあ、廃屋周りを見てみないか？」慎が提案
する。

「いいんじゃない」稔は応じた。

三人は慎の提案どうりに廃ビルの周りを回って見ることにした。
不気味としかい

いようのないひび割れの沢山ある建物の回りは草木が乱雑に生い茂
っていて、雑草が彼らの歩みを遅々としたものにした。

「うつとおしいな」

秀が苛々した声を出した。建物には入りたくなさそうだったが、
外は平気なようだ。

「これは死霊もいないよ。こんなところじゃ人もよりつかないし」

稔が言った。

「予想を覆すのが死霊だろ？」

慎はどんどん進んでいく。廃屋をぐるりと回ったが死霊は出てこない。

「ガセじゃねえの？」慎はまるで稔を責めるかのようにそう言った。

「知らないよ。わからないからこうやって調べてんだろ」

稔は言った。

「なあ、廃ビルの中入ってみようよ」秀が提案した。

「この中を……」

慎は不安げに廃ビルを見上げた。ビルは不気味に三人を見下ろしている。

稔がビルに近付いていく。廃墟とはいえ、窓はしっかりと閉まっている。開けようとしたが、鍵はしっかりと掛かっているようだ。

「入れないのかね」

不思議なことに気付いた。いくつかの窓は真新しいものに見えた。壊された窓を替えたのだろうか。しかしこんな使われなくなったビルの窓を修繕する意味はあるのだろうか。稔にはわからなかった。

正面口も閉ざされている。見ると南京錠が掛かっている。

稔は思案した。そして、やはり方法は一つだと考えた。

窓に向かって銃を向ける。

「本当に入るつもりなんだな」背後で慎の呆れ声がした。

「おい！ 何をしている」咄嗟に三人は振り向いた。

「そこに入る気じゃないだろうな」白髪の男が鬼のような形相をして立っていた。ライフル銃が威圧的だった。

「そんなつもりはないですよ」稔は銃をしまつて冷静に答えた。

「そのビルはな、いわくつきだ。誰もそこに入れないように鍵を掛けてるんだ。絶対に入ろうなんて思うなよ」

「いわくつてなんだい？」ライフルにも臆さずに慎がたずねる。

「死霊が出たんだ。だからそこは廃墟になったんだ。今では知らん。かなり駆除はした。だけどあいつらは虫みたいに湧くからな。危険

だ。絶対に入るなよ」

男は注意だけすると去った。

「どうしようか？」慎が稔に聞いた。

「決まってる」

稔は窓ガラスを撃った。ガラスは割れなかった。「強化ガラスかな？ それともガラスって結構丈夫なのか」秀が言った。

稔は舌打ちした。ビルは諦めるしかなさそうだ。

だが……。せつかく目の前に樂園があるのに。

「お困りのようだね」

幸平達が戻ると、稔たちの姿はなかった。

「あいつらまだ頑張ってるのかね」

幸平たちは結局一匹の死霊も見つからなかった。

幸平は稔に電話してみた。

「死霊は見つかったのか？」

稔が電話にでた。心なしか、嬉しそうな声だ。

「駄目だよ。全然いねえ。そっちは？」

「豊作だよ。とにかくお前たちもこっちにこいよ。廃墟ビルの中にいるからさ」

電話は切れた。

廃墟の中？ 幸平はビルを見た。不気味なビルだ。こんなところにあいつらは入ってたのか。そもそも室内に死霊が出るなんて、おかしい。

家に死霊が出るということはありえなくはない。しかし死霊が最初から室内で発生するのは実に稀なケースだ。

「稔たちは廃墟の中だって。行ってみようか」

「まじかよ？ 別に廃墟ツアーにきたわけじゃないっていったのは誰だよ」洋二が呆れる。

「いやそれ言ったのは俺だけど。とにかく行ってみよう」

正面のドアは閉まっていたが、南京錠は掛かっていなかった。扉

自体が妙に綺麗だと思ったが特に気にならなかった。幸平は扉を開けた。

扉の中は薄暗かった。無数の窓からは昼下がりの陽光が射している。静かだった。そして、不気味だった。

「気味わりいよ」洋二が低く呟く。

「どこに稔達はいるんだろう」六人の中で一番温厚な性格の市瀬楓が囁き声を出す。

廊下を進む。ここは元々何の建物なのだろうか。外観は汚なかったが、中はそれほどでもない。壁やモルタルの床を見てもさほど古さを感じない。彼らが想像したほど古い建物ではなさそうだった。静かだか、銃声がした。「秀の銃だ」幸平は予想した。音が小さく、威力が低い小さめの銃。小さな秀にはぴったりだ。音は階上から聞こえてきた。

「二階かな」楓が言った。

階段を上がる。エレベーターもあるが、無用の長物だ。室内に通じる扉もどうも開けるのはためらわれた。

またも銃声。何やら興奮した叫び声。

階段を上がりきり二階につく。

死霊が二匹、廊下の中央に陣取っている。三人に気付くとふらふらと歩みよってきた。

死霊二匹が同時に倒れた。奥には慎が得意げな顔をしていた。

「きたかよ」

「なんでこんなところに死霊が……」幸平は戸惑っている。

「こんなところだからだろ。獲物はまだまだいるぞ。撃ちまくれよ」

慎は近くの扉を開けた。オフィスにはパソコンの置かれたデスクが沢山ある。そして死霊たちも沢山いた。

「何だよこれ」洋二が目を見張った。

慎が目茶苦茶に銃を撃ちまくる。

「増殖しやがったんだろうな」

いつのまにか稔がいた。稔の顔は愉快そうで、目には興奮の色が

ある。

「どうなつてんだ？ 廃墟だからって……こんなありえねえ」幸平が言った。

「俺だつてわからないけど、とにかく撃ちまくるしかないだろ。駆除駆除！」稔は向かいの扉を開き、やはり沢山いる死霊たちに鉛玉を浴びせた。

「ショットガン持ってくればよかった」洋二は死霊を思いきり狩れることがわかった、何故ここに死霊が大量発生しているのだろうなどと疑問を考えることを止めた。やることは一つ。十人十色の死霊が目の前によりどりみどり。やることは一つだ。洋二は銃で撃ち始めた。会社にながら制服を着ていない死霊たちは銃声に反応して寄ってくるが、すぐに撃ち殺されて消滅を開始する。

死霊つてのはいるところにはいるもんだと洋二と幸平は感動した。銃声は途切れない。部屋の死霊を全滅させても次の部屋にいる。

彼らは狂喜して弾丸を死霊に撃ちこんでいる。その様子を傍から見ればどちらも狂気に蝕まれているように見える。異常な様子なのは間違いないが、彼らはとても愉しんでいた。

稔は銃声が気になりだした。これでは地域住民というカス共がくるかもしれない。最悪警察を呼ばれることもあるだろう。だとしたら困った事態になる。だがこちらには死霊駆除という大義名分がある。とはいえ、不法侵入をどう言い訳しようか。

まあいい。楽しむだけ楽しんだらとつとずらからう。

銃声が喧しいので楓は四階に向かった。階下から響く発砲音もこの程度なら気にならない。

廊下に死霊の気配はない。

扉の一つを開けてみる。大きな死霊が目の前にいた。死霊の手がにゅっと伸び、楓の細腕を掴んだ。

咄嗟に腕を振った。力強い掴みだが死霊の手は完全な形で楓の腕を掴んではいなく、楓が必死に振り払うとなんとか死霊の手を解くことができた。

手からは逃れたときに銃を落としてしまった。あわてて楓は床に投げられた銃を拾った。

死霊が扉からぞろぞろ出て来る。すでに階段は死霊たちに視界を阻まれ見えない、階下に逃れることは無理そうだ。

死霊が廊下に押し寄せる。

だが階段は一つではないはずだ。楓は死霊に背中を向けて廊下を走った。階段は廊下の端にあった。だがあるうことか、こちらからも死霊の群れが階段を上がってきていた。

何故なのか、理由を考える暇はなかった。どうすればいい？ 反対方向からも死霊は向かってきている。数は大分減っている。おそらく階段を下りたものもいるのだろう。だが階段から上がってくるものも合わせて二十体は軽くいる。死霊たちはいずれもふらついた動作で一心に楓に迫ってくる。一見虚ろな目は確実に楓を捉えていた。

「助けて！」

階下の仲間に助けを求めるが、果たして聞こえたかどうか。

ぬるぬると銃が滑る。弾はポケットに充分。身を守るには、生きてこの窮地を脱するには、銃を撃つことだ。できれば、正確に。

一発。よし、頭蓋に命中。二発、三発。

楓が死霊に対してもっとも恐れているの彼らには死の恐怖がないということだ。できれば仲間の死で彼らが怯むことがあれば、その隙に突破することもできるだろう。だが彼らは倒れた仲間を踏み越えてくる。

向きを変えて何発か撃つ。銃弾は全て当たったが、死霊は倒れない。楓にとって、当たり所が悪かった。

弾切れに気付くとすぐにポケットから弾を補充する。慌てる。手もべたべたで弾がうまく入らない。

ちくしょう、くそつたれが。

弾を補充し終わるとすぐに銃を乱射する。うまく脳にヒットしたのは一体だけだった。肩や腕の被弾はかすり傷。腹にダメージを受

けても緩慢な動きになるが、まだ向かってくる。

すぐに弾が切れた。両側の死霊は楓まで二メートルのところまできている。

楓は絶叫するも、死霊は迫る。弾を補充するゆとりはなく、彼は泣き叫んでいた。

楓に一番乗りしたのはスーツを着たスキンヘッドだった。肩を掴まれ、自身の目を楓の目と合わせようとする。

見るな！ 楓は一瞬抵抗した。目を閉じたのだ。恐怖が彼の自衛を解いた。目を開くと死霊の目が覗いていた。

辺りが暗くなっていく。まるで深淵の闇に落ちる感覚。落ちる。落下している。下に底があるのに気付くと楓は絶叫した。しかし現実には彼はただ、死霊の目を虚ろな目で覗くだけだった。

銃声は遙か遠く、別の家で聞こえるピアノのように響いていた。心地いい音色とは言い難い。

痛みがあった。鈍い痛みだ。見ると、天井があった。

「大丈夫か？」

銃声と誰かの声。今度は鮮明に聞こえた。

「上にいくなら行くって言うてから行け」幸平がそう叫びながら死霊を撃っている。

「大丈夫なのか」

稔が楓の様子を確認してくる。

楓はうなずいた

「大丈夫だよ」

「あやうくあいつらの仲間入りだったぜ」洋二が陽気に言った。

「無理するなよ」稔はほっとすると立ち上がり、号令をかけた。

「ここ片付いたら引き揚げよう。扉はもう開けるなよ」

まだまだ撃ち足りないと不満に思うが、楓が死霊になってしまつと色々まずいことになる。この遊びはきわめて危険なものだ。毎年必ず死霊狩りをする生徒が現れる。法で取りしまっても、学校側が禁止しても、進んで死霊殺しを始める輩はいる。そして中には無惨

にも逆に狩られることになる。

誰一人欠けてもまずい状況になるのは間違いない。廊下の死霊たちを撃ち滅ぼし、楓を運んで外にでた。

「楓、後ろの座席には乗れるな？」稔がふらつく楓に声をかける。

「なんとか」楓は頼りない声を出した。

六人は早々にそこから離れた。

一章 十八話（前書き）

一章が長い

一章 十八話

昼下がりに憂黎は再びあの通りにいた。懐にはナイフを帯びているが、銃を使うのも辞さない気持ちだった。

死霊が歩いている。住宅街で死霊が歩いていれば、銃を撃つチャンスだと誰かに撃たれるのが関の山だ。住民が窓から銃で撃つケースも多い。

しかしここはまるでそんな気配がない。人通りも少ないし、民家には相変わらず人の気配がしない。か弱き死霊たちにはいい場所なのかもしれない。

昼間にきてよかったと憂黎は思う。夕方ほどこの一帯を不気味に感じない。日が照らしているので暖かい。

ナイフを替えた。死霊駆除用の用途がメインの殺傷力の高い、エッジの効いたナイフだ。アクティブバッファローというナイフでは有名なブランド。まさに戦闘用のナイフ。値段は八万と割高だった。パソコンを買うために貯めた金を全て注ぎ込んだ。惜しくはなかった。

ナイフは特製の革袋の中で出番を待っている。革袋はバイスという死霊退治グッズを扱う有名ブランドだ。値段が高いが、品質は優れている。

服は好きだった。ブランドの洒落たデザインの服を買うのは大好きだ。バイスの革袋は二万円だ。四万円はするのが半額で買えたのは死霊狩りグッズ店、丸坂が閉店になったからだ。売れなくなったのは別の店が近くにあちこち増えたからだ。競争に負けたのだ。

アクティブバッファローのナイフとバイスの革袋、ナイフの滑りを防ぐ二万円したノーブランドの手袋。だが役目は果たしてくれそうだ。

憂黎はうずうずしていた。早く死霊が出てくれればいいのに。死霊は憂黎が望みに答えるように姿を見せた。緑色の縁をした眼鏡

を掛け、赤いポロシャツを着ている。

背が高いなと憂黎は思った。ふらつきが少ない。つまりそれほど手強い相手ということ。

憂黎は革袋からナイフを取り出した。日の光に照らされ、銀色の凶器が光り輝いた。

勝負は早めに決まった。憂黎のナイフは死霊の喉を切っていた。深さは十分。死霊は血を流して……倒れなかった。

死霊は憂黎の右腕を掴むと顔の近くまで引き寄せ、噛み付こうとした。

憂黎は死霊を突き飛ばして噛み付かれるのを防いだ。突き飛ばされた死霊はよろめいて倒れた。その隙に憂黎は死霊の心臓にナイフを突き立てた。

死霊は溶けだした。慌ててナイフを引き抜く。死霊はすぐに風になって消えた。

危ないところだったと憂黎は思う。死霊に噛まれても死にはしないが、顎の力は力はなかなか強く、腕を噛み千切られることはないだろうが、深い傷を負うのは確かだ。それに菌が原因で熱が出ることもあるようだ。気をつけないといけない。

憂黎は心を落ち着かせ、次の死霊を探した。しばらく探索していると通路に二匹目が現れた。二匹目はナイフで喉を掻き切った。簡単だった。練習通りにやれば案外できるものだ。バイスのナイフの切れ味も確かのような。もちろん、前に使っていたナイフも予備として革袋に入れてある。

次の獲物はなかなか出てこなかった。さすがに三匹目は難しいのかと憂黎は日光の下で思った。歩き疲れてきたのでいったん大通りに戻ることにした。

人が多いとほっとするというのは死霊狩りをやって初めて覚えた感覚だ。人通りは少ないにせよ、人がいるというだけで安心する。

自動販売機に硬貨を入れ、コーヒを飲んで一息つく。喉の渇き

を癒すと今度は腹が減ってきた。狩りの準備に夢中で食事を碌に取らなかった。不覚だ。戦いにはかなりのエネルギーがいるというのに。

というわけでコンビニに立ち寄った。ひんやりとした空間が汗だくの体を冷やす。汗くさくなっていないかと憂黎は心配したが、財布の中身は後百円玉が四枚。制汗スプレーなどを買う余裕はない。

お握りを二つ買って外に出る。夏場ではないのにこの暑さ。異常気象というやつだろう。温暖化の影響というやつだろうか。

暑いのはうんざりすると憂黎は一人、舌打ちする。寒いのもうんざりする。四季の風情を感じるのは悪くないが、毎年夏風邪や寒さで風邪を引くのはつまらない。

お握りを食べ終え、すこし休憩を取る。それから再び裏路地を越えて寂れた場所に戻った。

三匹目が憂黎に背を向けて歩いていた。憂黎は、背後から切り掛かるようなことはしない。それでは面白くないからだ。

こっそりと——とはいえ普通の死霊は鈍いので、わりと音を出してもあまり気にしなかった——憂黎は歩き、死霊のすぐ背後にたった。大きな死霊の背中には隙だらけだった。

背を躊躇なく蹴っ飛ばす。

死霊は当然気付いた。不意打ちで死霊はようやく人間の存在を知った。

憂黎は不安を覚えた。躊躇なく蹴ったが、全くダメージがないように思えた。憂黎の出せる限りの渾身の蹴りだったのだが。

だが肉弾戦で勝負するわけではない。鈍痛である死霊相手にひ弱な憂黎では勝ち目がない。憂黎はナイフを構えた。

死霊は憂黎より遥かに大きい。今まで戦った死霊の中では最大だ。その死霊が巨大な腕を伸ばし、ごつく紫色をした手で憂黎の首を絞めた。

呼吸はできないし、かなりの痛みがあった。しかし憂黎はまだ冷静でいられた。死霊の伸びた腕に勢いよくナイフを突き刺す。

死霊は腕を離す。痛みがあるのかどうか、死霊の顔が変わらないので憂黎にはなんともいえない。

喉目掛けてのナイフの一薙ぎは外れて、顎に傷を入れた。

憂黎はいったん離れた。相手が太柄だからか、プレッシャーは半端ではない。

死霊は突進してきた。素早い動きだった。憂黎は腹にナイフを突き立てた。死霊は倒れず、何か気味の悪い液体を腹から流しながら憂黎を吹っ飛ばした。

飛ばされながらも憂黎は革袋から予備のナイフを取り出した。立ち上がるとすでに死霊が間合いを詰めていた。

逃げることはできるだろう。死霊は健常者の走るスピードにはついてこれないし、長距離に極端に弱い。だが、それでは負けたことになる。何故か、憂黎はそれが嫌だった。それに高級ナイフがまだ敵の腹に刺さっているのだ。

頭を狙え！ 自身の脳裏からそう叫び声がした。憂黎はそれに従い、怪物の頭部にナイフを勢いよく刺した。

怪物は嫌な悲鳴をあげると液体をほとばしらせて倒れた。液体は憂黎の体にもかかったが、すぐに消えていく。

どうやら勝ったようだ。泡のように消えた死霊の遺体場所にはナイフが煌めいている。憂黎はナイフを取った。これで三匹目。

次の獲物を決めようと辺りを見回していると、ふっと勢いがなくなつた。

またこの感覚だ。憂鬱という名の悪魔が戻って来た。

急に込み上げる空しさ。虚無感。今までの戦果がすごく阿呆らしくなる。一人で戦っている自分がすごく孤独に思えてくる。嬉々として買った高価なナイフも、くだらないものを買ってしまったと悔やむ。

くそつ。だけど仲間と、クラスメイトと一緒に死霊退治をしたら余計に憂鬱になるだろう。

憂黎は拾ったナイフをアスファルトに叩き落とし、地面にうずく

まった。

一体、この気持ちは何なんだろう。何故自分だけこんな苦痛を味わなければならぬのだろう。

孤独。暗闇の中。自分から孤独に堕ちている。最低の気分。

四匹目は諦めることにした。まだ午後の三時だ。家で漫画でも読むことにしよう。復讐を成し遂げることができないのが残念だった。

一章 十九話

水島直也のいる暴走グループは唐突に解散した。グループリーダーが就職するからだ。元々リーダーで持っているような希薄な仲間意識の集まりだ。チームはリーダーの一言であっさり解散となった。水島直也にとっては晴天の霹靂な出来事だった。彼には居場所がここしかなかった。解散となれば、自分の居場所を失ってしまう。それは彼には恐怖だった。

最後の集まりが終わり、それぞれが帰ろうとすると、下っ端の小さいが悪そうな顔をした後輩を呼んだ。

「何ですか？」

「お前このまま終わっちまっつていいのかよ？」

「いや……仕方ないですよ。副リーダーもやる気ないし。でも俺、自分でチーム作りましたよ。ここの奴の半分くらいが入るんですけど」

「へえ？」初耳だった。「何だよ。俺はのけ者かよ？」

「いやそんなことないです」直也の後輩は慌てた。直也の異常性は十分に理解している。

「なら俺も入れるよ」

「はあ。でも直也さんが俺の下ってわけにはいかないでしょ？」

直也は考えた。

「そうだな。俺がてめえの下ってのはうまくねえな。わかった。俺がリーダーになろう」

「そうですか」後輩は残念がった。せつかく自分がリーダーで同じ年の多いこの仲間と走れると思ったのに。先輩連中はほとんどがグループを卒業し、厳しさから解放されると思っていた。しかしそれは許されないことのようにだ。水嶋直也がリーダーに。今までのリーダーは厳しいが優しい面もあった。だが直也はどうだろう。この男はただの狂人でしかない。

「よろしく願います」

「まかせろ。俺は厭しいぜ」

狂ってるだけさと直也の後輩は思った。

「楽しくなりそうだ」

リーダーかと直也は不敵に笑う。これで今まで以上にやりたいことができる。

一章 二十話

透はクラスの友人とマクドナルドで食事をしたのちに帰宅した。

今日は中間試験で昼間には終わったが、夕方までボーリングをしていたのだ。スポーツ万能の透にはボーリングも得意で、ハンバーガーを奢りで食べることができた。

帰宅したのが六時。すぐに試験勉強に取り組まないといけない。一夜漬けでやるわけではないが、不安な箇所はいくらでもある。

居間にいくと憂黎がいた。

「よう、勉強はどうだ？」

憂黎はゆっくりと透に顔を向けた。

「透兄。随分遅い」

「まあ、ちよつと玉を転がしてたりしてね」

透はすぐに憂黎がまた陰鬱な気分に戻っているのだと気付いた。憂黎がそういう気分なら、なんとか陽気な気分にならせてやりたいと思うのが兄貴心だ。

「息抜きにゲームでもやろうぜ？」

憂黎はテレビゲームが結構好きだ。最近はまだやらなくなってきたが。ロールプレイングゲームや格闘ゲームが好きなようだ。徹はゲームは不得意だが憂黎と一緒にやるのは嫌いではなかった。光がいれば三人でできるのだが。親父も誘ってもいいが、やはりここは兄弟だけのほうがいいだろう。

「ちよつとならね」

憂黎はオーケーした。

バイク音がした。消えるとすぐに玄関のドアが開き、光が顔を出した。

「よう。弟たち」

光は相変わらずだった。金髪に口ピアス。赤いライダーズジャケット。

グッドタイミングで帰ってきたなと二人は思う。

「光。ちょうど今憂黎とゲームやろうと思ってたんだ。やるだろ？」
透は早速誘った。

「いいだろう。たまにはお前たちと遊ばないとな」

三人はゲームをした。憂黎はなんとなく気分が晴れ、透は試験で成績が少し下がるのはやむなしと諦めた。光はゲームが徹以上に下手なのでストレスを溜めることになった。

こういうときには独りではないと思える。だが油断は全くできなかった。闇は、いつでもすぐ側にあるからだ。そのことは十分わかっていた。

一章 二十一話

結局試験の点はいつもより下がっていた。母親に厭味を言われるだろう。だが志望する大学には十分合格範囲なので余裕はあった。

「テストどうだった？」

同じクラスメイトの有下佳美が聞いてきた。

「佳美よりは悪いかな」

「へえ、珍しいね。透君って結構出来る子なのに」

徹は微妙な表情を浮かべる。

「憂黎君って透君にあんまり似てないよね」

「そっかな」

唐突に話題を変えたなと透は思う。

「どっちもかつこいいけどね。でも憂黎君って大人しそうだね」

「そんなことないけど。人見知りする奴だから」

佳美は何かを言いかけて、躊躇してやめた。透にはそれがわかった。薄々何を言いたかったかも察しがつく。

「そっか。またね」

有下佳美は自分の席に戻った。

周知の事実じゃないかと透は思う。わざわざ確認を入れることもない。

憂黎は死霊の闇に深く入りこんだことがある。そのため二週間入院したのだ。

死霊の闇。死霊たちが人間たちを襲うのは人肉を欲するためではない。人を、自分たちの仲間にするためだ。彼ら死霊たちに捕らえ、目を長時間覗くと、死霊と化す。それも一際凶暴で、手強い死霊になる。プロのハンターすら死霊化した人間とは苦戦するという。

あの時は光と一緒に心配ばかりしていた。憂黎が死霊になってしまったらどうしようかと気が気でなかった。子供が死霊化するケースは稀で、その前に死んでしまうほうが多いようだ。どっちも嫌だ

った。幸い、憂黎は死霊化しなかったし、死にもせずに無事に退院した。

透は思う。憂黎は誰よりも死霊を憎んでいいはずだ。だが、憂黎にそんな気持ちはないようだ。光は腰抜けだと呆れていたが。

昼食の時間だということを透はすっかり忘れていた。友人の鳩田を誘い、購買に向かった。

一章 二十二話

会社帰りに憂一はどことなく寄り道をしたい気分に乗られた。時刻は十時を過ぎている。妻には遅くなるから寝ていてもいいと連絡している。だから家に直帰してもあまり面白みがない。疲れはあるが、明日仕事をすれば休日だ。

普段とは別の道を通るのも悪くない。とりあえずはいつも通りハイウェイをひた走り、いつも降りる場所よりだいぶ前のところで降りた。左右にたんぼが広がる田舎道をゆつくりと進む。知らない道だったが、家のある方向へと走らせる。つまらない道だと思う。

車を一時停止させる。目の前に人がいて、通行を阻んでいた。人ではないということは薄々わかっていたが、しかし最近はやはりよく出沒する。

ライフル銃は車の中に必ず置いていた。拳銃も、もちろん持っているが、やはりライフル銃のほうが楽しい。

ライフルを手にし、窓を開けて体を乗り出す。ドアから外に出て撃つのは素人のやることだ。助手席に座っているのなら走りながら撃つこともできる。昔は友人とよくやったものだ。付き合いたての聡美ともよく死霊狩りをしたものだ。あの頃は聡美もただの擦れっからしで、不良じみていた。だから光という存在が出来上がったのだ。

銃口を死霊に向ける。確実に死霊かどうか、確認する。ふらつくあしどりは酩酊した老人を思わせるが、暗がりだろうと連中が死霊であるというのは一目瞭然だ。灰色の裸体。

撃つ。弾丸は勢いよく死霊の頭に瞬時に到達し、死霊の脳を破壊することに成功した。死霊は倒れ、醜い浄化が始まる。

これにて終了。あつけないものだ。銃を戻すと何事もなかったかのように車を走らせた。

しかし懸念はあった。死霊の数は再び減ってきているはずだ。し

かし憂一には段々増加の一途をたどっているのではという予感が拭えなかった。知人の目撃情報は絶えない。会社でも話題は死霊のことが多い。

彼らは人間の憂さ晴らし的存在のはずだ。逆に人を脅かすなどいうのはあつてはならない。もちろんたまに被害がでるのはわかる。連中はどこからともなく出現し、人を仲間にしようとするのかと考えていない。

死霊の仲間いりをした知人もいた。大学のテニスサークルの仲間だ。テニスはさほど上達しなかったが、今も交友のある仲間ができた。

死霊に襲わたいきさつは不明だが、運がなかったか、ドジったかだろう。繁華街の路地裏に一匹の死霊がうろついていた。仲間がそれを撮ってメールに添付して寄越してきた。間違いなく大学のサークルで一年先輩だった。テニスは上手いが気性の激しい奴だった。同じバイト先の先輩でもあり、よくこっぴどく怒られていた。正直鬱陶しいと常を感じていた。仲間内でもなんだか付き合いづらいという評判があつた。

「化けもののほうが向いてるよ」

仲間の一人がそいつを銃殺する前に呟いた言葉がなんだか気に入った。嫌な奴だったが、虚ろな顔でうろつくそいつに憎しみは湧かなかった。ただただ哀れに思っただけだった。涙は出なかったが。くだらないことを思い出しているうちに時刻は十一時を回っていた。アクセルを吹かして家路を急いだ。

一章 二十三話

最近憂黎にまわりつく蠅が鬱陶しいと安達未来は感じていた。みらい彼女は憂黎の隣の席で、憂黎に恋心を抱いているものの、内気だからなかなか積極的になれなかった。

ちよくちよく来る雌豚共は憂黎を好いてはいるが、恋人になるうなどとは思っていないようなのでなんとも思わなかった。しかし、今度は明らかに憂黎を狙っている不届き者が現れた。

赤根薫。名前からして嫌悪感があるその女は同じクラスで未来の列の最後尾にいた。

嫌らしい女。ずっと前から憂黎の背中を見つめて嫌らしい妄想を掻き立てていたに違いない。

腹の立つことに茜薫は美人だった。古い言い方でいえばクラスのマドンナ的存在であるのは間違いない。アイドル的存在の憂黎に惹かれるのはわからないでもない。

隣になったときから未来は憂黎の少女漫画に出てくる男子のような中性的な顔立ちに惹かれた。顔はいいし、未来好みの華奢そうな体。ぞくぞくした。

茜薫のアプローチが上手くいっていないのは密かに知っていた。薫は死霊狩りに反感を持っている。女子にはそういうのが多いが、未来は違った。死霊を狩るのは反対じゃない。父親はプロのハンターだ。父親が死霊を駆除しているから生計がなっている。父親のことは尊敬している。

未来もハンターだった。暇なときに銃を持って死霊を探すのはよくあることだ。

そして憂黎君も死霊狩りをする！ 思わぬ共通する趣味がわかって未来は胸をときめかせた。

だったら、やることは一つだ。内気な未来は、それらしい接触方法を考えついた。

一章 二十四話

赤根薫がいないので憂黎はほっとした。と、同時にどこか寂しい気持ちにもなった。少し彼女に冷た過ぎたかもしれないという後悔の気持ちが湧くが、死霊を狩るという前に女のことを気にしている場合ではないだろう。まあ、いいや。部活をしているだけかもしれない。と憂黎はどこか引つ掛かりながらも学校から離れた。背後から何者かが跡を付けていることには気付かなかった。

電車に乗り降り、馴染みの狩場に。すでに夕日が射している。暗くなる前に一匹でも出くわしたいものだ。

相変わらず人気はないが狩場としてはそのほうが断然いい。人家は人が住んでいないのかと思っただ、魚の焼ける匂いが漂ってきた。秋刀魚だろうか。

前方に一匹の死霊を発見した。離れているために小さな点にしか見えないが、確かに死霊だ。

ナイフを構えて死霊との距離を縮める。間違いない。憂黎はにやりとした。こんなにも早く獲物に出くわすとは。有り難い。

銃声がし、死霊が倒れた。

憂黎はわけがわからずに立ち止まる。

左の通路から銃を持った女子高生の姿が現れた。憂黎の通う高校の制服を着ているその少女は憂黎を見た。

「憂黎君？ 奇遇だね……」

隣の席の安達未来。憂黎は何故彼女がこんなところにいるのか考えた。答えはでない。

「なんでこんなところ——この近くに住んでるのか？」

「違うよ。ちょっと死霊退治をしてただけ。ここって結構穴場なんだよね」

憂黎は怪訝な顔をした。偶然に隣の席のクラスメイトが同じ場所

で死霊狩りをしている。ありえない話ではないが、どうも胡散臭い。未来とはあまり話したことがない。憂黎より大人しく控えめな少女なので、話すきっかけがあまりなかった。憂黎自身席が隣同士だからといって積極的に話して交友を深めるということはない。

未来は憂黎のナイフに目を注いだ。そして笑った。

「憂黎君も死霊駆除だ。ならもしかして獲物を横取りしちやっただかな？」

「別にいいけど」言葉とは裏腹に憂黎は猛烈に腹を立てていた。未来が自分で認めたように、獲物を横取りされた気分だ。

予想以上に憂黎の顔が険しいので未来は戸惑っているようだった。本当なら女なのに死霊狩りをしているということに好感を得られるはずだったのだろう。

「憂黎君もよくここにくるの？」

「まあね……でも場所を変えてくれない？」

憂黎の言葉はナイフのように未来の胸に突き刺さったようだった。

「え？」

「お互い狩りを楽しみたいだろう？ 同じ場所にいると奪い合いになる」

未来はこんなにも冷たい言葉を予想していなかったようで、戸惑っている。

「でも憂黎君。一人で狩りは危険だよ」

「そっちも一人だろ」

「いつもは仲間とやってるんだよ」

未来の言葉は嘘ではなかった。普段は三人で組んでいる。そのうちの一人、親友の片桐岬は残忍な死霊ハンターだった。

「それにナイフであいつらと戦うなんて危なすぎ」

「ほっとけよ」

憂黎は不快さを隠さなかった。自分の聖域を汚された気分。

「狩りは二人のほうが楽しいよ」

「俺は一人のほうがいいんだ」

未来の顔が思い詰めたように苦しそうになる。それから彼女は絞り出すように口を開いた。

「あたし憂黎君と一緒にしたいの」

少女の思わぬ言葉は憂黎の苛立ちを消した。

「憂黎君と一緒にハンティングをしたいの。駄目かな？」

少女の目は真つすぐで、憂黎としてはもう冷たい言葉を吐くことはできそうもなかった。

「別にいいけどさ」

少女の顔がぱあつと明るくなった。

「だけど条件が一つ」

「何？」

「銃は禁止」

未来は戸惑いの笑みを浮かべる。

「でもどうやって戦うの？」

憂黎はバイスの革袋から予備のナイフを取り出した。

「これ貸すから」

未来はおずおずと憂黎からナイフを受け取った。

「ナイフじゃ怖い」

憂黎はため息をついた。確かに女がナイフ一つ持っても死霊と戦えるわけがない。それに憂黎は誰かと共同でなんてことは嫌いだった。独りでやりたい

ならなるべく対等になるようにすればいい。憂黎は思うが、いい方法が浮かばない。

「なあ、死霊が溜まっている場所知らないか？」

憂黎は聞いたが、駄目元だった。そんな都合のいい場所あるわけがない。

「あるよ」未来はさらりとそう答えた。

一章 二十五話

場所を変え、やってきたのは小高い丘の上だった。眼下には迷路のようにもみえる住宅街。家々の石塀はかなり高く、分厚く見える。理由は察しがつく。道路をうるつくのは人間ではなく、死霊たちだ。それもかなりの数だ。

「さっきの場所は死霊スポットとしては数が少ないよ。ここならかなりいるよ」

「だけど競争激しいんだろうな」

「そうでもない。ここには死霊の泉だから」

憂黎は青ざめた。

「それじゃ、ちょっと危険すぎるな」

「そうだね。何人も死霊になっちゃったし。あたしの中学の友達だっているよ。まだうるついているかも」

ああ、と憂黎は思いだした。竊木町といえば、死霊スポットで有名な場所があったつけ。ハンターたちが駆除をしたが、無限に死霊たちが湧くエリア。ここがそうなのか。日本全国にある死霊の泉の一つというわけだ。

「ここなら好きなだけ撃てるね」

未来は嬉しそうな顔をするが、憂黎は不安を感じていた。

「ここからライフル銃で狙っていくのも楽しいかもね」

憂黎は未来を見た。未来のどこか危なげな横顔を見れば、未来が死霊狩りをするのが嘘ではないとわかる。それどころか未来はおそらくフリークの域に近いのではないか。

だが頼もしい。女がこれほど頼りに思えるとは。

「じゃあ、いつてみる？」

憂黎の様子を伺うように首をかしげて未来は言った。憂黎はそのしぐさにどきりとした。未来はそれなりに可愛いな。赤根薫とはまた違った美しさだ。色気では負けるようだが。

「銃声禁止区域ではないんだな？」

「大丈夫だよ。いこ」

なんだか遊園地に入っていく少女のように、嬉々とした様子で未来は丘を駆け降りていく。短いスカートがひらひらと揺れる。憂黎はそれとは対症的に、恐怖感を露にゆつくりと降りていった。

未来は車道に達すると手慣れた様子で颯爽と銃を抜き、構え、警戒しながら住宅街の奥に足を向かわせる。

憂黎はあくまでナイフで戦いたかった。アクティブバッファローのナイフを取り出して未来に続く。道の向こうには三匹の死霊がたまっている。

憂黎は苦笑した。一匹に遭うのも大変だったのに。

「どうするの憂黎君。撃っちゃう？」

どうしようか？ 未来に任せたらおそらく三匹すぐに片付いてしまっただろう。それではつまらないし、意味がない。

だが三匹を一度に相手どるのは無謀だ。どうすればいいか。

「まず俺が三匹をおびき寄せる。未来は隙を見て背後に回って刺してくれよ」

「でも三匹相手はちょっと厳しいよ。銃、使わないと」

憂黎は躊躇う。未来の言っていることはもつともだ。二人がかいだろうと三匹の死霊をナイフで相手どるのは危険な賭けだ。

「憂黎君が銃を使いたくない気持ち、なんとなくわかるよ」

未来はどこからかうような笑みを憂黎に向けた。

「共感できないけど。でもね、そんなこと気にする必要ないんだよ。ここでは」

未来が別の路地を指注した。

憂黎は目を見開いた。

「そうみたいだな」

死霊の群れが迫りつつあった。

三発の銃声。憂黎が振り返ると三匹の死霊が消滅しているところだった。

未来はピンクのハンドバックから弾丸の入った箱の束を憂黎に見せた。未来の顔は輝いている。

「どんどん撃たないと生きて帰れないんだ」

どうもそうらしい。すでに来た道からは死霊たちが押し寄せてきている。

これが死霊の泉か。憂黎は銃を取り出した。しのこのいってられない。撃ちまくるしか道はない。

一章 二十六話

楓は自分の名前が嫌いだった。両親はなんだってこんな女のような名前をつけたのだろう。暗闇の中に臃げに母親と父親の顔が浮かんでくる。

母さんと叫ぶ。しかしその声は虚しく響いた。

よくわからない。暗く、寒い。仲間は……仲間はいいのだろうか。自分の仲間。友達。

稔の顔が浮かんできた。仲間内でもっとも頼りがいがあり、チームを引っ張る力がある。楓は稔に尊敬の念を抱いている。だがそんな稔の顔もどこか遠い。

幸平。慎。友人たちの姿が現れては消える。

何か妙だ。酷く……寂しい？ いや、虚しい。暗闇に、楓は独りぼっちだった。酷く寒い。このままどうなるんだろう。辺りは完全なる闇に包まれた。それからしばらく闇が続き、それから一条の光が遠く一点に輝き、一気に光が押し寄せてきた。

目を開くと見慣れない天井だった。

上体を起こす。ここが病室だとぼんやりした頭でも理解できた。

どうして病院に……？ 記憶が断片的ではつきりしない。確か、ビル。そう、廃ビルにいたんだ。そして死霊に捕まり、危ないところだった。でも助かり、そこから出て、バイクに乗っているときに……気を失った。おそらくそれで今、病院にいる。

稔達はどこにいるだろうか。何だか妙に人恋しい気分だった。悪夢が楓を弱気にしていた。

病室のドアが開いた。稔に幸平が病室に入ってきた。

「起きたんだな」稔は別になんでもないことのように言った。

「で？ どんな気分なんだ？」幸平は興味津々といった様子だ。

「別に変わらないよ。死霊になるとも思った？」楓は笑う。

「俺はてつきり楓はもう駄目かなと思ったよ。でもその様子じゃち

やんと人間みたいだな」幸平は平然と言った。

稔が幸平の頭を小突いた。「お前デリカシーがなさすぎ。医者だって大丈夫だっていつてたしき。まあ……もう少し遅れたら助からなかったろうとも言われたけどな」

「スケボーしてたら偶然死霊の群れに遭遇したって設定だからな。ちゃんと口裏合わせろよ」幸平が言う。

楓は笑う。

「わかった。偶然遭遇したんだ」

「大丈夫なんだな」稔が聞く。

「大丈夫——かなりやばいと思ったけど、助けてくれたしね——ありがとう」

「いや、お前が死んだら俺たち世間から非難ゴウゴウだしよ」幸平がにやりとする。

「そうだな。一時狩りは止めるか」稔が言う。

「俺のせい？」

「いや、メンバーで話しあって決めたんだ。今のやり方じゃ危険すぎたんだ。仕方ないよ」

「でも一時、だからな。また再開する予定だ」幸平は親指を立てた。扉が開かれ白衣の中年が入ってきた。

「じゃ、俺たち行くよ。またくるからさ」稔はそう言うと幸平を連れて出て行った。

医師から詳しい話を聞く。二日ほど様子を見て退院だそうだ。その後はすぐに学校に通える。医師は伝えることを伝えると出ていった。

楓はなんとなく嫌な気分になった。まただ。また足を引っ張った。思えば小学生の頃から他人の足を引っ張ることしかしていない気がする。何をしてもうまくいかない。死霊狩りは楽しかった。しかし、当分できないわけだ。

嫌だ。まだ一月ほど中になっていたが、こんなに楽しい遊びは滅多にないのに。自分のせいで……。

しかし楓は気付いた。足を引っ張るのなら、引っ張る足がなければいい。

それはいい考えかもしれない。しかし、それは一人、つまり孤独ということだ。稔がないと何もできない自分に果たして一人だけの狩りなどできるだろうか。疑問だ。

なんとなくけだるいのは死霊の目にやられたのが後を引いているのだろうか。あの暗く……いや。楓は横になった。今は何も思いついたくない。眠るのはつまらないが、気持ちに構わず身体は眠りへと誘っていった。

夢の中で楓はナイフと銃を駆使して死霊を殺し回っていた。最高に楽しいひととき。

かなり楽しい！　かなり楽しいよ！　人を！　人を殺してるみたいだよ！

一章 二十七話

憂黎が思うに、このままでは確実に二人とも死霊の仲間入りをしてしまうということ。薬莢は確かに大量にあるが、死霊の数は尋常ではない。

未来は慣れていた。膨大な数の死霊が四方の路地から迫るというのに冷静さを失なわない。それどころか、どこか余裕を感じているかのようにも思え、憂黎はこの素晴らしい茶髪を二つに編み垂らしている少女に尊敬のような念を抱いた。かつこいい女だ。

迫る死霊に未来は銃を発砲する。素早く正確な射撃は今の憂黎には真似できないものだった。が、死霊の数が減る気配はない。

憂黎と未来は瞬時に判断した。四方から来る死霊達のもっとも数が少ないところを集中砲火し、一点突破する。全てを相手にするのは薬莢も時間もない。

二人が放つ銃弾は死霊たちを蜂の巣にし四散させるが、道を開けるには手を休む暇はなかった。一番手薄だと思える箇所を中央を狙うが、すぐに後方あるいは横の死霊たちによって肉壁が出来上がる。だが一点に集中しているうちにさすがに死霊の数も減り、空ぎができた。二人は猛然とその隙の向こうへ走り、死霊たちの包囲から逃れることができた。

「やった」憂黎は安堵する。

「まだまだ。これからだよ」

正面には死霊たちの群れ。後方には合流した死霊たちが醜悪な群れを成している。

他に道はなく、前の死霊の群れを突破するしか道はなさそうだ。

二人は構え、前進しながら死霊を撃ち続けた。消滅する死霊たち数は後方に比べると圧倒的に少なく、後ろに追い付かれることなく前方の敵を殲滅することができた。

弾はまだまだある。憂黎はにやりとした。ナイフでの一騎打ちと

は違うスリルだ。銃でも条件次第では全く勝るといふ気持ちにならない。これは……いい勝負だからだろう。死霊たちが無限に湧く場所なのだ。銃くらいでは、二人でも、ハンデにもならない。

未来は笑っている。走りながら、歓喜の笑い声をあげていた。

「楽しい！」

確かに。憂黎も同意だった。

突き当たりを右へ。三匹の死霊。ものの数ではない。二人で一発ずつ撃つ。二匹消滅する。

「憂黎君撃っていいよ」

憂黎は残り一匹に狙いを定め、トリガーを引いた。やや狙いより右斜め上だが、死霊は消滅した。

「やるね。ナイフ使いだけど射撃も上手だね」

「こうやってゆっくり狙えて撃つならね」

走りながらも死霊に撃ち込むことができる未来は憂黎よりずっと優れたハンターなのだろう。だが負けるものか。

途中の右への曲がり角で二人は立ち止まる。どうしようか？

「戻るコースならここを曲がるべきだろ？」

「先に行っても戻れるよ。ただ、この先はちよつと危険ゾーンだけだね」

「危険って？」

「Cタイプがいるのはこの向こうって噂だし」

「そりゃあ怖い」

「でしょ」

「……右にいく」憂黎は無理はしないほうがいいと判断した。

「いいよ。でもどのみちCタイプだって動いてる。どこいっても出くわすときは出くわすと思うよ」

だけどそれでも危険だといわれる箇所に自ら足を突っ込むなんて真似はしたくない。

右に曲がる。憂黎は空を見た。いつの間にか曇りになっていて、雷の鳴る音が響いている。嫌な感じだ。雨は死霊を活気づかせると

いうもの。

ショットガンでもあればと憂黎は思う。群れになった死霊に多大なダメージを与えることができたかもしれない。死霊は痛みを感じないというが、身体の損傷はそれだけ相手を弱らすことになる。

「未来はいつもここを狩場に？」ふと聞いてみる。

「そうだね。一番手っ取り早い場所だから。でも町の死霊駆除にはあまり貢献してないかも」

「そうでもないだろ」とは言っておいたが、確かに無限に湧く場所で駆除するのは無意味だ。

「きたよ」

死霊が一匹。退治してくださいといわんばかりだ。可哀相だからほつておいてもいいが、道の真ん中に立ち二人を睨み付けている。未来が撃つたと思った。しかし銃声はなく、死霊は消滅してしまふ。未来は何かを投げたようだ。そんな動作だった。

「何かした？」

未来は死霊の倒れた場所からナイフを拾った。

「投げたの？」憂黎は驚く。

「ナイフ投げは得意だから」

「ふうん」

憂黎は思った。死霊狩りでは未来に勝てないな。勝てる要素がない。

左右の角を無視して直進すると死霊の群れに出くわした。

「こいつら越えれば出口かな」憂黎は銃を構える。

「もっと楽しんでほしいのに」未来はまだまだ余裕そうだった。

一章 二十八話

透が帰宅すると憂黎が続けて帰ってきた。

「どっか行つてたのか？」

「ちよつとね。疲れた」

憂黎は本当に疲れた顔をしていたが、透には憂黎がいつものような憂いを帯びていないように見えた。テレビなどあまり見ないのになんやりの様子でバラエティ番組を視聴している。疲れているというのは本当なようだ。

「風呂入った？」

憂黎は首を縦に振る。

「じゃ、入ってくるよ」

「ごゆっくり」

風呂に浸かると疲れが流れ落ちていく。とてもいい気持ちだ。クルスの仲間とグラウンドでサッカーをしたので足が疲弊していた。ゲームには勝ったが、たまにやるスポーツは疲れるなとしみじみ思った。だが部活をする気にはなれない。毎日同じスポーツなんて飽きてしまう。今所属している夏限定の水泳部の補欠がちょうどいい。

「どうのこうのいつても透ちゃんも不良っぽいね」

昔、初音にそう言われた。光の血が流れているということだろうか。確かに結構やんちゃな面があるのは否定できないが、それでも自制はできる。光だって不良じみてはいるが、気のいい人間だ。だが残酷な面があることも否めない。光は小学生のころから憂黎をいじめて心から愉悦するというどこか残忍さとユーモアを兼ね備えた奴だった。高学年になると憂黎をいじめるのをやめて死霊をいじめることに命を燃やした。これでもかというくらい死霊に石を投げ付けたり、吸血鬼を退治するのと思う木の杭で実際に付いて殺したりした。

そのときは透も一緒になって楽しんだのだ。子供というのは残忍

なものだ。しかし危ない遊びだ。捕まれば子供の力だ。死霊から逃れることはできなかつただろう。死霊はスリリングの味わいというものを見せてくれる。だがあまり嵌ると……快樂に耽るかの如く人は変わってしまうかもしれない。

「ごゆっくり、か。透はにやりとした。憂黎め、何か楽しいことがあつたに違いない。」

一章 二十九話

赤根薫はいつものように憂黎の背中にみとれていたが、どうもいつもと違うなと思った。その違いにはすぐに気付いた。憂黎の隣の女子——名前は未来だ。わかりやすい名前だし、どこか羨ましい。薫という名前は嫌いではないが、最近見られる前衛的な名前とは無縁だ。未来はまだありふれたほうではあるが、なんとなく悔しい。

その隣の未来と憂黎がどこか仲良さげに話をしているではないか。別に嫉妬をす

るわけではないが、羨ましかった。憂黎の微かな横顔から察するに、とても楽しんでいる。まるで恋仲のように二人の会話は弾んでいる。「薫う、大丈夫？」隣の席の友人が少し妙な薫に声をかけるが、薫は適当に頷いいただけだった。

何かあったんだろうか。薫は勘繰る。昨日まで隣同士だというのに何かを貸りるくらいしか会話がなさそうな二人だったのに。

まずいなと薫は思う。今更だが未来はなかなか可愛いのだ。これでは憂黎が摩くのも無理はないかもしれない。

憂黎君。あたしじゃ駄目なの？ 憂黎の背中に思いを送るが、むろん憂黎には届かない。

薫は嘆息した。隣の友人はまだ心配そうに薫を見ていた。

まあ……仕方ないのかもしれない。運命とは残酷なものだから。だけど、誰かのものになると確定するまでは諦めるものか。

一章 三十話

市瀬楓はすでに退院していた。稔たちは死霊狩りを再開することにしたようだ。ただし、楓は駄目だという。

「悪いな。これがお互いのためだ」幸平がにこやかに言ったのは昼の食堂だった。

「別に狩り以外は一緒だぜ？　いつもどおりさ」稔はどこか申し訳なさそうだが、

ただの演技にも見える。

「狩りは危険だし、お前には危険すぎるよ」稔が言う。

「仕方ねえよ」幸平が言った。

楓は何も言えなかった。結局彼らは足を引っ張る存在を切り捨て、自分たちだけで楽しもうというのだ。

当然なのかもしれない。だが、やはり裏切られたという気持ちが出て来る。

何かの話で盛り上がる二人を見る。遠い。なんだか稔が遠い存在に思えてきた。

こいつらは自分のなんなのだった。友達？　わからない。そもそもどうしてこのメンツにいたんだろう。他に……他に仲良くしてくれる友人がいなかったからだろうか。

二人が去っていく。全てが馬鹿馬鹿しいものに感じる。くだらない。

楓は気付いた。今まで自分は稔たちのオプションに過ぎなかったのだ。

愕然としながら食堂を出た。周りの話し声が心に痛かった。

放課後。楓は銃と袋一杯の薬莢に薄っぺらい通学鞆を背負い自転車を漕いだ。目指すは鐙木町の在家塚。そこに、死霊の泉がある。無数の死霊たちが無限に湧き続けるという絶叫スポットだ。住宅街

が舞台。

楓は薄い胸板を叩いた。やってやる。一人でもやってやる。優秀なハンターだということを見せてやる。何より……こんな楽しいゲームを終わらせたくはない。

憂黎と未来は二人揃って鎬木町にきていた。今日は中間試験の最終日。まだまだ午後になって間もない。天気は最高に晴れている。

絶好のハンティング日和だと憂黎は思った。日の光りは死霊を弱体化させる力を持つ。とはいえ多勢相手なので、今回も遠慮は無用だ。

防弾ガラスの入ったセダンの高級車が優雅に住宅地からでてきた。死霊が徘徊し、銃弾が飛び交う場所を移動するには当然、対応した車が必要だ。

彼ら地域住民にはこうしてハンティングにくる若者など鬱陶しいだけだろう。禿の目立つ中年が怪訝な顔つきで憂黎たちを睨み、隣の化粧の濃い女に何か話しかけている。

「いこう」

風を受け、髪を掻き分けるながら未来が言った。

ちなみに未来は肩にショットガンを提げている。今日は本気ということだろうかと憂黎は思った。

二人は丘の階段を下り、再び住宅地へと入り込んだ。

どこからか銃声が聞こえる。あまり遠くではない。他のハンターもいるのは当然だ。ここには数多の死霊たちが銃で撃たれるのを待っているのだから。

「ショットガンの経験は？」未来が聞いてきた。

「全然ないよ。ライフルだったら親父ので何度か撃ったことあるけど」

「病み付きになるよ、ショットガンは。扱いづらいけど、ちまちま拳銃撃つよりすかつとするよ」

銃声が響く。だいぶ近い。

日は高く、空は青い。鷲が空を舞っている。風が吹いて少女の髪を揺らしている。

安達未来か。憂黎は彼女の揺れる髪を眺める。いい女かもしれない。

四ツ辻にでる。左右に死霊たちがいる。点々とだがそれなりの数。何体かはこちらに気付いたようだ。

正面から二人組の男が現れた。痩せ型で眼鏡を掛けたのと、小柄な坊主。どちらも二十代だろうか。どちらも銃を持っている。

二人とも憂黎たちを見ると軽く会釈をしてきた道を引き返していった。

人を間違えて撃つてはならない。常識だ。安全教育は徹底している。銃は必要限度以上の角度で撃つてはならない、等。憂黎たちが人を死霊と誤認して発砲することは焦っていてもまずないことだ。

うろつく死霊たちを無視して進む。向かってくる者だけを撃つ。緩い登り坂になっている道の上にはうんざりする数の死霊たちがいる。

「ま、備えはばっちりだけど」憂黎はつぶやく。

「あれだけいるとさすがに気持ち悪いね」

一つの塊のような死霊の群れは日差しから避けるように日影に集まっている。彼らでも暑さは苦手なのかなと憂黎は思ったが、おそろく吸血鬼と同じく、日の光に嫌われた存在なのだろうと勝手に納得した。

Dタイプはその最たるものだ。彼らは日光があると消滅してしまうと聞く。だが、闇夜には絶対に出会いたくない存在だ。

上るにつれ死霊が多く見える。日の光は嫌いなようだが、獲物がいるときは別らしい。日影からでてきて気味の悪い呻き声をあげる。彼らの歓喜の声なのだろうか。皆殺しにされるとも知らず。

未来はイサカのショットガンを死霊の塊の中央に撃ち込んだ。激しい銃声と共に死霊たちが四、五匹傷を負って動きを止めた。

未来はさらに続けざま三発撃ち込み、薬莢を装填した。死霊たちは塊の中で重傷を負った者は倒れ、消滅した。

なるほどと憂黎はショットガンの威力を実感した。しかしどこかイマイチだ。所詮鳥獣を撃つのに使う銃だ。死霊用ではない。そもそもショットガンは十八歳以下は使用してはいけないし、何よりも住宅地での使用などもっての他だ。憂黎は未来という女を、少し心配し始めた。

「やっぱり微妙。ライフルのほうがよかった？」未来は明るい笑顔で憂黎に問う。

「ライフルのほうがいいかな」

「そうかもね」

ライフルも年齢制限で引つ掛かる、とは言わないでおくことにした。小中学生で銃を使って遊んでいた者の感覚は少し麻痺している。後はハンドガンを撃ち込み続けた。黒い塊だった死霊たちもあっという間に数を減らし、全滅した。

これじゃつまらないなと憂黎は感じた。

「これからだよ」憂黎の思いを察したのか、未来はそういった。

憂黎は未来の言葉を信じることにした。

未来を先頭に二人は住宅街を歩く。道はいくらでもあるが、未来は自分の行き先があり、分かれ道も迷うことなく進んでいく。憂黎は何も聞かずにについていった。

しばらくいくと未来は十字路の真ん中で立ちどまった。

「ここが一番死霊のいるポイントだよ」

憂黎は辺りを見回す。何の気配もしないし、何もいない。

「何もいないみたいだけど」

未来はティファニーの時計を見る。

「もうすぐだから。気長に待とうよ」

待つのは得意だ。気長なほうだから。

一章 三十一話

楓はこの箇木町在家塚住宅にきたのは間違いだったかもしれないと思った。天気は快晴で絶好の死霊狩り日和なのだが、いかんせん死霊の数が多過ぎた。

楓の持つハンドガンは女性でも扱いやすいように作られた威力の低いもので、装弾数は十二発だが正確に死霊の頭部を狙わないと致命傷にはならない頼り難い銃だ。

それで今、十八匹の死霊相手に苦戦を強いられていた。

親父の銃を拝借してくればよかったなと楓は思った。デザートイグルなら一発で決まりなのに。

幸いにも薬莢はリユックに山のように積んできたが、そのせいで重く、まともに走ることもできなかった。なんて馬鹿なんだろうと楓は自己嫌悪に陥りながら、比較的軽い音の銃声を響かせる。

楓は十字路にいて、そして死霊に囲まれていた。正面の十八匹は十六匹に減ったが、左右からは十四程度の死霊がそれぞれやってきている。後方には八匹くらいだろうか。極めて危険な状況といえた。過去にこうして死霊の仲間入りをした者は後を絶たない。

銃声が響く。楓は背後からの音に振り返る。八匹いた死霊は消滅し、その後ろから二人の金髪の女が現れた。どちらも余裕の笑みを浮かべ、絶望していた半泣きの楓を嘲笑うかのようだった。

「一人でハンティングなんて危険だよ」女の一人がいう。背丈の高い女で、サブマシンガンで武装していた。

ウージーかぁ、と楓は半ば憧れの目で武器を見た。

「バディいないの？ 友達は大事にしないとね」もう一人の女は小柄で、レミントンを所持している。背丈のわりに大きな銃だ。

「そんなちやちな銃でここにくるなんて……自殺したいの？」大柄な女は呆れた声をだす。

「引き返したほうがいいよ。まだ入口だし」小柄な女は馬鹿にした

ように言う。

彼女たちは十字路の右側の死霊をあつという間に全滅させると、そのまま右に進んでいった。

屈辱を覚えたが、彼女たちの言うことはもつともだ。ハンティングの上級者でもない自分がこんなハンドガン一丁できていい場所ではなかった。おまけに一人で。

とぼとぼと引き返す。リュックがいやに重い。しかし彼女たちは銃の許可証があつてあんな銃を持ち歩いているのだろうか。見たところ二十代だから年齢は達しているが、そもそもこんな住宅街でサブマシンガンやらショットガンを使うのは禁止されているはずだ。

黙認されているのだろう。ここはそういう武器でなければ渡り歩けない。ここを出たらもう少し死霊の出る頻度が低い場所に向かう。

楓の前に再び死霊たちが立ち塞がった。数は十五匹ほど。運の悪いことに動きが比較的早い死霊で、楓の腕と粗末な銃では対処できない相手であった。楓は迷わず逃げたが、無事にここから出られるのか、不安になった。

憂黎たちは楓が遭遇した以上の数の死霊を相手に、ハンドガンで武器に進むことも引くこともできない激戦に挑んでいた。

死霊は縦横に無数にいて、せつせと二人に向かつてきていた。動きは緩慢だが数が半端ではなく、小数だが動きが早く、凶暴なものもいた。

未来はそんな死霊を見逃すに撃ち殺していた。憂黎はとにかく一発で死霊を消滅させることに専念した。

未来はハンドガンを撃ち尽くすと装填せずにホルスターにしまい、ショットガンを構え、発射した。

憂黎も負けじと死霊の頭を正確に狙う。地味だが、確実に一弾で仕留めれば死霊たちに掴みかかれる前に倒しきることができるだろう。

散らばった弾では致命傷にはなりえないが、未来はハンドガンよりも高威力の銃として近距離で一匹の死霊を倒すことにした。散弾が他の死霊にも当たれば進行をほんの少しだけ遅くすることができる。

憂黎は冷や汗を描きながらも冷静に死霊の頭部を狙っていく。心の中ではこんなところにくるんじゃないやなかつたという気持ちと、何かすごく楽しいことをしているという気持ちがいり乱れていたが、前者の気持ちのほうが優っていた。

「装填！」

未来が叫ぶと憂黎は前に立って死霊たちに銃弾を食らわせる。未来は早く、すぐに復帰して死霊たちに散弾を浴びせた。

確実に死霊は減っている。だが時間は少なかった。左右後方に蠢く死霊の群れが、すでに憂黎たちから五メートルと離れていないところにいるのだから。

「走って！」

未来が叫ぶと疾走し、死霊の間を縫うようにして群れの向こう側に到達した。憂黎も続いたが動きの早い死霊に肩を掴まれた。未来が銃ですぐにその危機を救った。死霊の腕を離し、憂黎は未来の元に達した。

安心する暇はない。さらに先にも死霊の塊がいる。

左側に通路があるが、死霊たちがすでに通路の前を阻んでいる。交戦は避けられそうにない。

撃ちまくる。響く銃声は残る地域住民の午後の生活を憂鬱なものにしているだろうか。それとももう慣れて動じないのかもしれない。アサルトライフルのようなものがあればと憂黎は考えた。かなり楽になるだろうに。しかし隣で銃を間断なく撃つ未来は楽しげだ。不安を感じている自分が馬鹿みたいに思える。実戦経験の差か、性質の違いなのか。いずれにせよ、頼りになる味方なのは間違いない。死霊たちの数を減らし、半ば無理矢理突破する。走る。左右に通路がある。未来は立ちどまる。

足音だ。速い。左側の通路から誰かくる。それは二人の知っている顔だった。

「楓」

未来が叫ぶと、楓は立ちどまった。楓の顔は蒼白で、息が切れて苦しそうにしている。

「未来か？それに……雨宮」

楓は不思議に思った。未来は未来と、そして雨宮憂黎。この二人がどうしてこんなところにいるのだろう。

「楓、一人なの？」

未来と楓は同じ中学出身で、下の名前で呼び合うことはする。

「一人さ。そっちは二人か。いい銃持っていないかな？ こっちの銃じゃちよつときついんだ」楓は自分の持ってきた銃を二人に見せた。「そんなんでここにくるなんて無謀だよ。馬鹿だね」

楓は何も言い返せなかった。

「ちよつと一緒にいていいかな？ さすがに一人じゃきつくて」

「いいかな、憂黎君？」

「別にいいよ」

楓を憂黎を見た。未来と一緒に仲良くハンティングか。稔たちは雨宮のことが嫌いらしいけど。だけど悪いやつには見えない。随分と顔がいいのはどうも、気に入らないけど。

「じゃ、ついてきてもいいけど足引つ張らないでね」

楓は自分の銃をみる。やっぱり、何をしても足を引つ張ってしまう運命なのだろうか。

「じゃ、次いこ」未来が言った。

「あんまり危険なところはやめてね。俺の銃、しょぼいから」楓が言った。

「あんたの事情は知らないよ」未来は冷たく返した。

通路を右へ。そしてさらに突き当たりを左へ。先頭の未来が立ち

止まった。

楓は眼を凝らして前方を見る。何対かの死霊が道を阻んでいるが、銃を使わなくともすり抜けられそうだった。未来だったら造作もないだろう。

しかしその先に、未来が立ち止まったきっかけがあることに楓は気づいた。

あれは何だろう？ 三人は戸惑う。遙か先に一体の死霊がいるが、道の中央に立つその死霊は普通の死霊とは明らかに違う雰囲気を感じていた。死霊は真っ直ぐこちらを見ているように見えた。

緊張した様子で動向を見守る。何が違うのか、具体的に説明はできないが、あれは何か違うと楓にはわかる。

嫌な感じが過敏に彼の神経に伝わっている。暗闇が視界の隅を覆い始めた。難敵だ。

その死霊が動き出した。まっすぐ、こちらに向かってきている。未来がショットガンを構える。拳銃よりもこちらのほうが有効だと判断してのことだ。

死霊の俊敏な動きでこちらに迫ってくる。Cタイプの死霊。死霊の中でも特出している。楓は動揺した。未来は勝つ気であるのだろうか？ 逃げる気はなさそうだ——逃げても無駄ということを知っているのかもしれない。なにしろこのタイプの死霊は俊敏で足が速いのだ。

憂黎がハンドガンを撃ち込んだ。まだまだ薬莢の数はある。未来をフォローする。

隣で楓も発砲を始めた。今はこれしか方法がない。死霊の動きを鈍らせるのが肝要だった。

未来は散弾を発射した。死霊は散弾を浴びせられ、動きを止めた。死霊はまるで哀れむかのように未来を見つめた。

死霊が動き、未来は吹き飛ぶ。ショットガンが憂黎の足元に転がる。憂黎はすぐにそれを拾い、構えた。

未来は吹き飛ばされてもすぐに立ち上がり、ハンドガンの銃口を

死霊に向けて連続で撃った。

憂黎がショットガンを撃つ。至近距離で死霊の頭部に命中する。

死霊はさすがにまいったのか、よろめくと動きを止め、どこか怯えた様子になった。三人は構わずとにかく銃弾を撃ち込み、死霊に攻撃の隙を与えない。

死霊は逃げ出した。背を向けて素早く遠ざかる。

「未来、大丈夫か？」

憂黎が未来を気遣った。

「大丈夫。なんともない」

未来は腕に擦り傷を付けた以外は問題なさそうに見える。未来は傷口に消毒薬をつけ、ピンクのカットバンを貼った。

「さっきのやつ……Ｃタイプってでしょ？ あんなのもいるんだね」楓は言う。

「たまにでるけど、いつもは優秀な仲間がフォローしてくれるから」

憂黎は未来の言葉に傷ついたようだ。

「悪かったな、優秀じゃなくて」

憂黎が言つと未来は慌てた。

「べ、別に……楓が使えないってことだよ」

「俺か」

そういえばと楓は未来の仲間を思い出した。未来の友人の二人は有名だ。襟元宇美、片桐岬。特に片桐岬は中高生でハンティングをしている者なら知っているはずだ。男顔負けの猛者で、冷静沈着かつ冷酷非道に死霊を狩る。襟元宇美は遠くから一発で死霊の脳を破壊できる。話だけきくと、随分恐ろしい女のような。

「でもほら、死霊は撃退したし。憂黎君はできる人だよ」未来はまだ憂黎に気を遣っている。

慌てふためく未来を見て、楓は自分も憂黎のようにふてくされた態度を取ってみようかと思ったが、冷たい仕打ちが待ってるだろうと予想できたので止めておいた。しかしクールな女という印象だった未来もやはり顔のいい男が好きらしい。楓は小さく舌打ちした。

まるでお邪魔虫じゃないか。

「それで、これからどうする気でのいるの？　まだハンティングを続けるの？」楓は質問する。

「ううん。出るよ。弾も少なくなってきたし」

「出る道はわかるんだろ？　俺は全然わからないけど」憂黎が聞く。
「大体ね。じゃあ出よつか」

とはいえ出るにはまた死霊の群れをどうにかしないとイケないんだろ。うなと楓は思い、うんざりした。

一章 三十二話

結局四時頃に無事住宅街から離れることができた。

「よかった」楓はほっと息をついた。死霊たちとの戦いでリュックにつまった弾はほとんどなくなっていた。

「市瀬はどうして一人でいたんだ？ 稔たちと一緒にじゃないのかよ」憂黎が疑問を口にする。緊張から解けるとこういったことに考えがいく。

「大体あんた死霊につかまって昏睡状態で入院したんでしょ？ 懲りないね」

「だから、誰にも迷惑かけないように一人でやろうと思ったんだよ」
「とか言って本当は仲間に捨てられたんじゃないの」

楓は暗い顔をした。

憂黎は未来の無神経な言いようが気になった。下の名前で呼ぶのだ。多少親しい仲ではあるのだろう。しかし楓は見たところ明らかに傷ついている。

「凶星かよ」未来が言う。

「別に、いいよ。否定はできないしね」

未来はため息をついた。「冷たい奴らだね。ちよつとミスした程度なんでしょ？ 失敗を糧にしていつてだんだんいいチームになるのに」

「別にいいよ。俺がどじつたんだから」

「なら俺達と組めばいい」

憂黎の言葉に未来が驚いた顔で憂黎を見た。

「ちよつと……」

「駄目かな？」

「いや、二人の邪魔しちや悪いし」

未来は何もいわない。だが憂黎は楓が気の毒になった。理由はど
うあれ稔たちは楓と死霊狩りをするをやめたのだ。一人で死霊

狩りをするのは孤独だ。憂黎はそれを知っている。何よりも楓は寂しそうに見えた。不思議だ。自分が誰かを気遣うなんて。楓は死霊になりかけた。ならば、あの圧倒的な闇を体験したのだろう。同じ暗闇を見た者として親近感を抱いたのかもしれない。

「いいじゃん。市瀬。一緒にやろう。三人なら楽しいよ」

「ありがとう雨宮。考えとくよ。じゃあ俺は帰る。今日は色々迷惑かけた」

楓は去った。

憂黎は未来を顔色を見て未来の機嫌が悪いということがすぐにわかった。

「憂黎君はあたしだけじゃ嫌なの？」

「嫌じゃないよ。未来と一緒にハンティングは楽しい」

憂黎がにこやかに微笑みながらそう答えるとそれだけで未来は憂黎のことを責めれなくなっただようた。

「楓はたぶん仲間を求めている。頼むよ。知らない仲でもなさそうだしさ」

「中学からの縁なの。なんか弱々しいから面倒みてあげただけ……ね、今からゲーセンでもいかない？」

憂黎は首を振った。「テスト勉強しないと」

「そつえばそうだね。じゃあ今日は終了だね」

「駅に行こう」

今日もかなり楽しかったなと憂黎は気分がよかった。

「機嫌がよさそうじゃないか」

透にはすぐわかってしまっただな。しかしどうでもいいや。機嫌は確かにいい。ビールでも飲みたい気分だ。

「兄貴は最近死霊狩りはやってないの？」

「うん？ 死霊狩りねえ——ハンティングよりも受験だからな、俺たちは。俺は余裕気取ってるけど、周りが付き合ってくれないよ」
「カラオケやビリヤードをやる時間のほうが楽しいだけじゃないの」

か？ 憂黎には今日の楽しみ以外の楽しみを見いだせそうになかったので、ハンティングをしない兄を不思議に思った。

「光はどうなのかな」

「バイクで轢くのは好きだろうよ。でも兄貴が銃のこと話したことなんてないしなあ。あんまり興味ないと思う」

「俺は最近やってんだ」

透の箸の手が止まった。「まあ、気をつけろよ」

「わかってるよ」

しばらく会話がなく、二人とも黙々と食事を。母親はよくある町内会の集まりでいない。面倒臭い仕事をさせると憂一がよく憤るが、角が立つのも嫌なのでなるべく参加するようにしている。きっとそれなりに楽しんでいるに違いない。

「仲間とやってるんだろ？」透が聞いた。

「そう。鍋木町に行ってきた」

「在家塚？」

憂黎は頷く。

「あんな危ないところには行くなよ」

「気をつけてるよ」

「やめろつて。あそこは並じゃないぞ。何百人もあそこで死霊になったって話じゃないか。危なすぎる」

「親父みたいだ」憂黎は笑う。

透は驚いた。憂黎が笑った。いつもむっつりとしている憂黎がだ。仲間がよかったのか、死霊狩りが楽しいのか。だが、危険すぎる。

「憂黎、笑い事じゃないぞ。あそこ、在家塚だけはやめろ」

「俺は大丈夫だって。心配するなよ。兄貴の考えているようなことにはならないよ」

「なんでそんなことが断言できるんだよ」透は声を荒げた。

「うるさいな。あそこじゃないと満足できないんだ。ハンティングするやつならみんなそうさ」

「だけど、お前はまだ始めたばかりだろ？」

未来に未熟だと遠回しに言われたことを思いだす。腹が立つ。

「関係ないだろ。俺は死霊狩りに命を懸けてるんだ」

「そうかい。なら勝手にしろ」

「勝手にするさ」

憂黎は食事を終わるとさっさと二階に上がった。苛立ちと悪いことをしたなという思いが入り混じっていた。透に怒られたのは初めてではないが、兄貴面を通りこして父親面をされるのはいらつくものだ。しばらく口をきかないことにしよう。クソツタレ。

「でね、憂黎君、楓を加えるっていうの。二人で楽しくやってたのに。ひどいと思わない？」

未来の家では、自室のベッドで未来が友人の片桐岬と電話していた。

「そう、そうなの。ひどいよね。憂黎君って未来のことなんともおもってないのかな」

未来は憂黎が楓をメンツに入れるといったのが許せなかった。二人だけでハンティングを楽しみたかった。しかし憂黎がぶち壊そうとした。

「そうだよな。ねえ、また三人でハンティングしない？ 楓と三人でやつても意味ないし。え……ううん。諦めるわけじゃないんだけどね、憂黎君も楓と二人だけじゃつまんなくなつて、やっぱり未来と二人のほうがいいってなるかなって」

未来の部屋はぱっと見少女チックなわりかし普通の部屋だ。しかしピンクの引き出しには銃が一丁紛れている。机の上にも普通にルガーが置いてある。

「あー、だよな。そんな甘くないか。ですよねえ。でもなあ、憂黎君とのハンティングは失いなくないんだよね。どうすればいいかな……え、やっぱり？ ううん、わかった。それしかないよね。憂鬱

「ただ、妥協するしかないか。あ、そうだ、久しぶりに三人でやるよ、ハンティング」

一章 三十三話

結局三人で組むことになった。

「憂黎君がどうしてもって言うから仕方なく楓も入れてあげる」

「足を引っ張らないようにするよ」

「よろしくな」

憂黎の挨拶に楓もよろしくと返した。

「今日はどんなハントを？」憂黎が未来に尋ねた。

「今日はすぐに出れる場所でハンティング。そのほうがいいと思う」

「確かにそのほうがいいかもな」憂黎も同意した。

昨日のことを思い出す。何度死を覚悟したことか。透の意見は突っぱねたが、確かにここは危険な場所だ。未来くらい訓練を積まないと歩き回ることすらままならない。

「この銃どうかな？」

楓が二人に銃を見せた。昨日の銃とは違い、重厚感のある黒光りする銃だ。

「へえ、すごそうな銃だ」憂黎は関心を示した。

「まあ、昨日の銃に比べたら全然ましに見えるよ」

「だろ？」楓はにやりとした。

「これは親父の銃なんだ。死霊用に特化したプロ用の銃だよ。値段は知らないけど、普通の銃よりもずっと高いね」

確かに、憂黎は自分の銃と見比べた。だいぶ値段は違うだろうな。「よくそんなの貸してくれたじゃん」未来はまるで金塊でも見るような顔で楓の銃を眺めている。

「まあね」なんとなく不安を感じたのか楓は銃を未来から遠ざけた。「本当は許可を貰ったわけじゃないんだけどね。勝手に持ち出してきたんだ」

「大丈夫なのか？」憂黎が心配する。

「父親が気づいたらちよつと困るけど。でも普段は見向きもしない

古い机の一番下にしまつてあるんだ。たぶんばれないよ」

「その銃だと弾代もかかりそうだね。さ、いこうよ。薬莖は昨日より少ないから節約したほうがいいよ」

一章 三十四話

透は学校帰り、クラスの仲間とゲームセンターでテレビ画面の中のゾンビを銃で撃つゲームをした。弾代がかかる死霊狩りに比べたらコイン一枚でゾンビを撃ちまくれるこちらのほうがいいかもしれない。心の中では死霊狩りをしているだろう弟のことばかりを考えていた。あの馬鹿は今頃また死霊の群れを相手にしているのだろうか。

考えるとゲームで遊んでいる気にならない。友人たちには適当な言い訳をして先に帰ると伝えて家に向かう。

昨日憂黎に言ったことを、言い過ぎだとは思わなかった。だが、どう言おうが憂黎は頑としてこちらの意見など受け付けないだろう。そういう奴だ。

だがあそこは実際危険な場所だ。憂黎のような高校生がハンティングに行くべき場所じゃない。

駅に着いた。プラットフォームにいくと中村美音がいた。

「やあ」美音がどこか恥ずかしそうに挨拶してきた。

「よう」

「同じ電車かよ」

「そうみたいだな——買い出しかい？」

「まあ、ね」

透は少し躊躇したが、この出会いはいい機会だと捉えた。

「なあ、ちょっと付き合えるかな？」

美音は丸い目を透に向けた。

「どこに？」

「メシ屋にでも。相談したいことがあるんだ」

二人はファミレスに落ち着いた。金は透持ちなので、から揚げとポテトだけ注文した。美音はステーキだ。

「憂黎君なら大丈夫じゃない？」

「そんなの、わかんないだろ」

「結構慎重な感じじゃん」

「そうでもないんだよ」

美音はうまそうにステーキを頼張る。

「そう。でも大丈夫。弾って高いからね。憂黎君バイトしてないんでしょ？　すぐに現実を思いしることになるよ。ハンティングはプロか金持ちの道楽だって気づくはず」

美音のいうことはもつともかもしれない。銃弾はそんなに安くはない。弾を惜しみなく撃たねばいけないような場所ならかなりの数が必要になる。憂黎の小遣い程度ではとても無理だ。

「そうだよな。弾代かあ。そりゃあそうだな」

「でもあんな危ない場所に行くなんて憂黎君って結構大胆なんだね」

「あいつはそうなんだ。いつも何か自分のことなんて考えないで、無茶をする」

「いいじゃんそれは。透君の弟らしいよ」

だけどそれで死んでしまっただけは意味がない。例え、ハンティングが、死霊狩りが憂黎のもつともやりたいことだとしても。

「ご馳走さま。おいしかった」美音はステーキを食べ終えた。

満ち足りた顔だな、透は微笑した。

「付き合ってたときはよく奢ったよね」

「そうだった……結構奢った記憶あるんだけど」

「ごめん嘘。奢ったり奢られたりだったね。楽しかったな。透とのデートは」

そういえばこのファミレスも前に二人できていた。金がないから二人して安いものしか食べられなかった。今とさほど変わらない。

淡い中学時代の初恋の思い出。形は変われど、今もこうして流れ続けている。それは、とても素晴らしいことなのではないかと透は思った。

「ありがと美音」

「別に。また奢ってね
透は苦笑した。」

一章 三十五話（前書き）

一章 終わります

一章 三十五話

弾の値段は深刻な問題だと憂黎は風呂の中で今日の狩りを思い出して懸念を抱いた。金はほぼ底をついた。後は……バイトしかない。光は休日に工場でバイトをしている。これは両親には言っていないが、親も薄々何かしていることはわかってる。

透も前に焼肉屋で厨房のバイトをしていた。その店が潰れたからやめたのだか、その後は勉強に専念すると言って小遣い稼ぎはやめた。実際かなり成績が上がった。

バイトか。憂黎は接待はしなくなかった。かといって店の裏で雑務に追われる仕事も嫌だった。新聞配達もやる気にはなれない。

何かいい仕事はないだろうか。本屋がいいなと憂黎は考えた。接客は嫌だが、小さな本屋なら接客もたかが知れてる。本屋でなくてもいい。地味で人気がない店での接客仕事だ。これだ。楽そうだし誰かに情報を聞きたいが、誰に相談すればいいだろう。こんなときに頼りになる友人を多く作っておけば、いい店の情報が手に入ったかもしれない。しかし憂黎には親友と呼べる相手が極めて少ない。透に相談するのは無難だが、今は話す気にはなれない。

なら自分で調べるしかないだろう。チラシ、インターネット、求人誌。調べる方法ならいくらでもある。

風呂を出た憂黎は早速行動に移した。

「で、憂黎君はバイトをすることになったわけだね」
未来は何故か残念そうな顔をした。

「そうだよなあ。弾丸、高いからね」楓が言う。

「で、何のバイトなの？」未来は興味津々の様子だ。

「おもちゃ屋だよ。ハローキッズとかいう」

「あ、そこ知ってるよ。ラジコンとかガンπρα買ったりしたよ。小さい店だけど、結構いいんだ」

「いつからなわけ？」

「もう昨日行ってみた。レジ打ちはすぐ覚えられると思う。時給は八百円だって。安い？」

「普通じゃないかな」楓が返した。

三人は鐙木町在家塚前に集まり雑談をしている。天気は暗く、どこか薄ら寒い午後。彼らは銃を片手に今日も狩りを行おうとしている。

黒塗りのベンツが住宅地から出ていく。先程はピンクのジャガーが出ていった。どちらも窓ガラスは防弾仕様のものだ。

「ここは高級住宅街でもあるんだよなあ、やっぱり」楓がしみじみ言う。

「行こう。今日は昨日みたいにパニックにならないでね、楓」

「言うね、大丈夫だよ」

昨日楓は足の早い死霊に肩を掴まれ悲鳴を上げた。すぐに未来が助けてくれたが、しばらく情けなさに落ち込んだようだ。

Cタイプの死霊は要注意だなと憂黎は思う。あんなに俊敏な死霊が複数現れたら銃が強力でもかなり手強い。

気を引き締めないと。

「じゃあ、いこうか」憂黎が言った。気合いは十分。狩りの時だ。

憂黎達が狩りを始めている頃、加藤稔と谷口幸平そして辻井秀はバイクを飛ばして再び廃ビルにきていた。

「足手まといもないし、今日は楽しめるな」幸平が笑顔で言う。稔は複雑だった。楓は確かにミスをしてしまったが、あいつなりに頑張っていた。こんな形で仲間から外すというのは心苦しい。

だが、仕方がない。だってそうだろう？ 死霊が、無数の死霊が俺を呼んでいる。仲間が死霊にでもなったら大事だ。もう死霊狩りなんてできる状況ではなくなってしまう。このささやかで極上の楽し

みを、絶対に失いたくない。失ってたまるか。

「よし……入ろう。鍵閉まってないだろうな」

「大丈夫だろ。連中は扉を開けることすらできやしないし」秀が返す。

普通の死霊ならなと稔は思った。

正面の扉はさながら地獄への入口かのように重々しいが、待つているのは楽園のはずだ。

扉は開き、三人は中に入る。ここに入るのは三度目だが、何度きても多少の緊張感がある。

一階に死霊がいないのはいつものパターンだが、今日は廊下に死霊があふれていた。見ると右側の扉が開いている。

「誰だ、開けたままのやつは？」幸平はそう言うが早く銃を撃っていた。幸平の銃は叔父から借りたサブマシンガンで、あつという間に死霊を霧散させた。

「卑怯な武器だよ」マシンガンを撃ち終わり、薬莢の落ちる音が響いた後に秀がぼそりと言った。

幸平は奇怪な笑いをあげた。「やっべえな、これ。無敵すぎる」

「俺二階にいくから」ここは幸平の遊び場にしておこう。稔は階段を上がった。

「じゃあ俺も二階だか。幸平もやばくなったらすぐ来いよ」辻井も二階に上がる。

「任せとけて」

幸平は余裕の笑みを浮かべた。人の音がしたので死霊たちが群れを成して扉からでてくるが、問題はなかった。銃が火を噴き、死霊達を蜂の巣にする。幸平の太く若い腕はしっかりと自身の得物を構え、ほとばしる狂喜を体を感じながらも、冷静に射撃を開始した。

幸平と違って稔と秀はハンドガンを二丁づつだけだ。彼らの射撃はそれなりだが、勿論あまり無理はできない。二丁ある銃のうち、予備の一丁は二万円という中古の銃だ。撃てることは撃てるが、所

詮予備だ。メインに不備が生じた場合、すぐに立ち去るのがハンティングの常識だ。

二階は扉が閉まっていて、廊下に死霊がうつろっているというとはなかった。扉の奥から聞こえる奇っ怪なうめき声の多さで、向こう側にいる死霊の数が予想できる。

かなりの数だ。

一階からは銃声と、幸平の叫び声が聞こえる。まるで狂人だ。

稔は右側の扉を一つ開けてみた。中には想像通りの死霊の数だ。動きを倍速したような、Bタイプの死霊もいる。

ああ、嫌だ。稔はあの死霊が嫌いだった。何度も接触されそうになった。生かしておくのは危険な存在だ。

秀が撃つ。稔も続いて撃つ。とにかく、撃ちまくる。

二時間ほどで、三人は廃ビルの外に出た。まだまだ外は明るく、

三人はバイクの近くで休んだ。

「何だか疲れたな」幸平が呟く。

「しかしやっぱりここも死霊の泉と一緒になんだな。きりがねえ」稔が言う。

「こんなところで撃ち続けてたら金がいくらあっても足りねえな」秀が言った。

薬莢は底をついた。金も尽きた。バイト代を全て弾代に注ぎ込んだのだ。

「回数減らすか、もう少し数が少ないところで遊ぶか、どっちかな」稔が言う。

「だな」幸平が同意した。

「しばらくしてからまた再開だな」秀が言った。

勿論そうだと稔は思った。こんな障害如きでハンティングをやめてたまるか。俺のまだ短い人生の中で一番面白いこの遊びを。

しかし……ふと思った。このビルの鍵をくれた、あのスーツの男は一体何物なんだろう？ 今にして思えば、色々疑問だ。少し普通

ではないように見えたが。
まあ、いいか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8767x/>

死霊狩り

2011年10月29日15時09分発行